

倉橋文庫用

# 幼児の教育

第五十八卷 第二号



2

日本幼稚園協会

# 幼児のための紙芝居

34年1月配本

みんなであそぼう

12枚  
¥260

すのけのしし坊やはあばれん坊で  
ある日穴熊君とお友達になれた  
坊やは不思議なことに気がつ  
きました。穴熊君の足もとには  
美しい花がどっさり。

小さなつづら  
大きなつづら

12枚  
¥260

与兵のくらは昔から空っぽ  
の大きなつづらと小さなつづら  
のほかなにもありません。働き  
者の与兵はせめて小さいつづら  
に一ぱい金を溜めようと心がけ  
ていました。ところが……

新・日本名作童話紙芝居全集

幼児編 全五巻・各巻二十枚  
定価四〇〇円・全巻定価二〇〇〇円

- 1 さくら姫
- 2 森のじゃんぼう
- 3 こんぎつね
- 4 なきねこ村の  
ねずみが池
- 5 しくじった赤鬼

カタログ進呈

東京・渋谷・千駄ヶ谷五ノ一七  
振替東京二九八八五五  
電話(34)一四四八・三三三七  
一四四〇〇

教育画劇

2月1日配本

しろ

12枚  
¥260

しろい毛をした犬  
は不思議な犬です。  
ある時線路で遊んで  
いる坊やを助けたり  
火事場の中から子供  
を救ったり。しかも  
その時のしろ犬はし  
まつて真黒い毛をし  
ているのです。

かみさまのおれい

12枚  
¥260

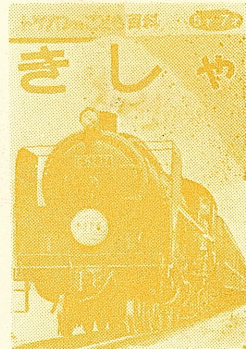
かみさまがなんで  
もすぎなものをくだ  
さるというからさあ  
たいへんです。グ  
ムの名作童話のお話  
えましい限りのほり

5~7才のお子さまに

## トツパンのこども百科 全12巻

- ☆①やくにたつどうぶつ
- ☆②じどうしや
- ☆③きしや
- ☆④せかいのふしぎ
- ☆⑤ふ
- ☆⑥ひこぶつきねぎ
- ☆⑦どいうぶつき
- ☆⑧世界一づくし
- ☆⑨でんしや
- ☆⑩たのしい工作
- ☆⑪こどもちしき
- ☆⑫東京見物

☆印既刊  
価各一三〇円



トツパン

東京都中央区日本橋茅場町1の20



# 幼児の教育

第五十八卷 二月号

表紙 黒崎義介

幼児の四季 冬.....	上沢謙二.....(2)
保育の計画における「主題」.....	坂元彦太郎.....(6)
幼稚園の意義と教師の資格.....	L.W.ベンナー.....(11)
* マウント・ホリヨーク大学付属幼稚園.....	L.W.ベンナー.....(15)
子どもの経験を生かして.....	片岡靈恵.....(18)
経験、活動、そして、創造的ということ.....	菊地正子.....(20)
幼児の経験を生かして.....	吉江紀子.....(22)
日頃感じたまま.....	木島睦子.....(25)
子どもの世界と発見.....	馬淵治子.....(27)
三才児の粘土遊びから.....	竹田俊雄.....(31)
入試と幼児.....	武南高志.....(34)
母の会と時間.....	林健造.....(36)
子どもの造形的発想について.....(2)	玉井収介.....(40)
幼児の心理療法.....(三)	加藤邦子.....(44)
現場の研究.....	いさむちゃん.....(58)
いさむちゃん.....	桜田佐.....(64)
保育者養成機関一覧.....(東京都)	

幼児の四季



冬

上 沢 謙 二

「どこへいっちゃったの。みんななくなっちゃった」

庭のすみにしゃがんでいたKちゃんがいきなり聞いたので、なんだかわけがわからなかった先生は聞きかえした。

「誰がいなくなったの。みんなあそんでいるじゃないの」

昼さがりの園庭に、園児たちは入りまじり入りみだれてあそんでいた。

「うん、虫だよ。どこへいっちゃったの。みんななくなっちゃった」

Kちゃんは、おなじことをいって、じっと地面を眺めた。

おそらくKちゃんは庭のすみのそのところで、春も、夏も、秋も、いろいろな虫に遇ったのだろう。それが冬の今は、いくら待っても出てこない。ふしぎでもあつたらう、不満でもあつたらう、さびしい気もしたらう。

そういう感情が入りまじって、突然の質問になつたのだらう。

「なるほど……なるほど……」

先生はうなずかないではいられなかった。

そうだ。あの蟻も蛇も這わない。蝶も燕も飛ばない。鶯も鈴虫も鳴かない。天上も地上もからっとしている。それが冬の姿である。

野も、山も、からっとする。そこにはもう緑の絨毯じゅうたんはない、紅葉の錦着にしぎはない。はだかになって、地肌が、山肌やまの肌があらわになる。

木々も葉を払いおとしてはだかになる。それで、先生がいう。

「木を見ましようね。冬は木の形がよく見える時です。桐の木や、桜の木や、銀杏の木や、ちがいますね。さあ、そのまねをしましょう。木のようにまっすぐにちゃんと立って。両手をたいらに横へ伸ばして。そう、桐さんの枝はそうなっていますね。こんどは両手をななめに上へ伸ばして。そう、桜さんの枝はそうなっていますね。こんどは両手をまっすぐに上へ伸ばして。そう、銀杏さんの枝はそうなっていますね。」

冬は、人は着物を重ねるが、自然は衣をぬぎすてる。そうして真相をあらわす時である。

だから、冬には飾りけがない。したがって変化が少ない。賑やかさが乏しい。遊びたくてたまらない子どもたちは物足りない。せめてごうごう吹く風が相手だ。その中へとびだしてわあわあさわぐ。「風の子」といわれるくらいだ。

ところが、その単調を破るために、自然はえらい用意をして、たいへんな芸当を演じる。

ふと、朝、目がさめる。なんだか、いつもとちがって、外の世界がシーンとしている。半身をおこしてなにげなく見まわすと、思わず目がパチパチとなる。窓を通して、部屋の中が明るい。その明るさがお天気の時のこととちがう。目を挙げて外を見る——途端に、大きな声かとびだした。

「あっ、雪だ」

同時に、パツと立ちあがる。

戸を押して見る。庭も、道も、野も、畑もない。ただ一面に真っ白。家も、森も、山も、ただ一様に真っ白。天地は白一色の天地になってしまったのだ。

それがたった一夜のうちに、誰も知らないうちに、そうなったのだ。急変化といってこんな急変化が、大変化といってこんな大変化があるだろうか。まさに「たいへんな芸当」である。これこそ自然でなければできない芸当だ。

だから、子どもは我を忘れておどりがあがる、とびだす、かけまわる。たちまち向きあって雪投げがはじまり、いっしょになって雪だるまつくりがはじまる。「わっわっ」という喊声と歓声が入りみだれて、おもてはたちどころにたのしい一大運動場に化する。

それとはまったく反対な場面。

みんなじっとしている。だまっている。そうしてならんでいる。誰もうごかない、話さない。だから、音もない、声もない。

二人寄ればしゃべりだす、三人寄ればさわぎだすのが幼児の常である。それがここでは五人、十人集まってい、いるかいないかのしずけさである。

なにがそうさせるのか。

みんなの頭のさきから足のさきまで、太陽の光がやんわりとふうわりと包んでいる。それがそうさせるのである。「日光浴」とはよくいった。ほんとうに大きな特別な湯槽ゆばねの中にひたっているようだ。

なんというよい気持だろう。「よい」というだけではない。ゆったりとしたうっとりとした気持である。それでも足りない。溶けこんでしまうような融け入ってしまうような気持である。否、それ以上である。なんとなくなつかしい、しんみりとした気持がおのずから湧いてくるのである。だから、ことばを交わさないでも、手を組まないでも、おたがいに心は通じ、思いはつながっていると感ずるのである。それで安心して、満足して、だまってじっとしているのである。

これが、冬の日なたの情景である。

「雪」と「日なた」。前者はよろこびの伴う興奮を与え、後者は満足を含む平穏を贈る。

冬の自然はそういう反対の環境を用意して、それぞれちがった意味と効果をもつ教育を、おのずから施してくれる。子どもに対して、なんと親切であり、適切であるだろう。

更に、この期に「お正月」がやってくる。

世界じゅうの子どもは、白い、黒い、黄色いの差なく、富める、中産、貧しきの別なく、健康、病弱、不具のちがいがなく、一斉に、平等に、一才を加える。

「一つ大きくなった」ということほど、子どもにとって、はっきりした自覚を与えるものはなからう。

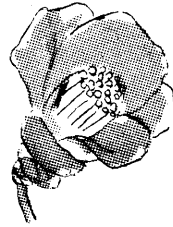
その自覚を内にして。外からはさまざまなうれしいこと、楽しいことが、つぎつぎにやってくる。よい着もの、新しい服。うまいおやつ、おいしいごちそう。凧あげ羽根つき、歌かるた。それがお正月である。

ある書き手がいった。「政治の舞台には老人が中心になる。戦争の舞台には軍人が中心になる。しかしお正月の舞台には子どもが中心になる」と。

正月三か日。否、五日、七日まで。お父さんもお母さんもおかしいお面をとって、お母さんもやかましい唇をぬぐって、子どもを中心に、本位に、思う存分よろこばせ、楽しませてやろう。その時の子どもものうれしさ楽しさは単なる感情的でなく、おのずから一種の自覚に裏づけられている。一年に一度の特別なうれしさ楽しさなのである。

春は「解放」。夏は「開放」。秋は「透徹」。冬は「沈潜」。そうしてその「沈潜」からまた「解放」へ、運転循環、継続関連。自然の教育プログラムは無尽蔵であり、無制限である。

# 保育の計画における「主題」



坂元彦太郎

一

幼稚園のような幼児教育機関において、その保育についての予定や計画をたてることは当然のことであるが、年間なり学期なり、あるいは月なり週なりの、長期にわたって具体的な案をつくってそれを書きとめるなり印刷にするなりしておくことが、わが国でのならわしみたいになっている。おそらく、わが国の他の種の学校におけるやりかたが、園にもうつってきたのだと思うが、ある人たちはこれは非常に重要なことと考えているようである。私は、それほど重要欠くべからざることまでは思わないのであるが、一種の流行みたいになって、多くの人たちはこういうことを何をおいてもしなけ

ればならぬことのように考えている。今さら、こうした流行の功罪をいっても仕方のないことで、妙にきゅうくつな考えで自らを縛りさえしなければ、あつてもいいことである。少なくとも、こういうものをたてるからには、たてることがプラスになるように、心がけねばならないであろう。

こうした文字にした案を、よく「カリキュラム」とよんでいるが、この語が適正に使われているとは私は思わない。それはとにかくとして、こうした案をつくることに狂ほん(?)したり、できたものを金科玉条で動かしてはならぬもののように考えることだけはやめてほしいものである。一応の心覚えとして書きとめたり印刷してあるのであつて、常に臨機応変に計画を変えることができるもの



であることを承知して、たてたいものである。

こうした、こういう案についての根本的な心構えが適正でなければならぬとともに、その計画の具体的なたて方についても、心しなければならぬこと、気付いていなければならぬことが、いくつあるのである。たとえば、幼稚園教育要領に示してある六つの領域をどう考えるか、というようなこともあるが、この小論では、教育の計画をたてる際の単位になるようなまとめ方をとりあげて考えてみたい。すなわち、幼稚園教育の中味を考えていく場合の、実際の内容のくぎり方を問題としてみたい。

## 二

現在普通におこなわれているやり方は、いわゆる「主題」とか「単元」とか、あるいは「題材」とか称する単位を、若干数だけ順次に配列して、それで全教育課程がカバーできていて、とするようなやり方である。一つの主題、もしくは単元は、ある長さの期間持続するところの、一連の活動であり、つながりがあった生活の様相である。そうした「主題」が寄り集って教育課程が成り立つが故に、いわば、全体を構成している有機的な単位であると考えられる。したがって、幼児の生活を展開してりっぱな教育的効果をあげるには、この主題を適切に考案し計画することが非常に大切である、と

考えている人が多い。率直に言えば、私は、こうしたものに、それほど重大な「魔力」を認めるものではないが、そういうものをたてるのがたいへん便利な点もあって、たてる以上は適切にやくだつようにしなければならないと思う。

ところが、案外、主題や単元そのものについての自覚や反省がゆきわたってなくて、ただ、思いつきで、もしくは他のをまねて、いろいろならべている向きが多いようである。私は、これから、主題や単元とよばれるものの、いろいろな類型をざぐりあてることから論をはじめよう。

厳密に言えば、「単元」というときには、経験主義的な単元をいうのであろうが、幼児の場合そういうものが成り立つかどうかは疑問であろう。狭義の経験的な単元といえば、幼児自体の計画にもとづく、幼児自体によるテーマの展開がなければならず、いわゆる「問題解決」的でもなければならぬ。しかし、幼児には、計画的に意図的に活動を展開することができるとはいたっていないのである。したがって、一歩さがって、常識的な用語として、「主題」さらに譲歩して「題材」ということばを使うか、「単元」をそうかどうかで用いるかであろう。

お互に影響しあうのか、まねしあうのか、あるいは園の通有性から自然に似たものになるのか、おそらくこの三つともの特徴であら

うが、いろいろな園でたてている「主題」には非常に類似したものが多く、それを、分類してみると、私は、次のような、四種類のものにわけることができるように思う。

- (1) 目標をそのまま主題にしているもの
- (2) 経験の内容を主題にしているもの
- (3) 幼児の活動を主題名にしているもの
- (4) 生活の背景になっているものを取りあげて主題にしているもの。

以下、単元の例をあげて、説明してみよう。

### 三

まず、第一の種類に属するものの例として「楽しい幼稚園」「からだを丈夫に」といった類のものがあげられるであろう。すなわち、その時期なり期間なりにおける子どもたちにさせるいろいろな活動や経験がめざしている中心的なねらい、もしくはねらいを総括したのもをもって、単元そのものの名前になっているのである。

第二の種類に属するものは、心ある幼稚園では「主題」なり「単元」にはあまりえらばないのが、普通のようなものである。たとえば「時計」といったものがこれに属するものといえよう。しかし、もし、一般の母親たちが考えているように、幼稚園では歌やおどりをな

教えるところだ、として、そうした歌やおどりの名前そのままを、幼児指導の単位と考えるような向きがあるとしたら（残念ながらあるかもしれない）これに属するであろう。また、小・中学校の一部の教師のように、教える知識の内容（たとえば、日本の産業、「掛算の九九」）をそのまま主題とする人（たとえば、ひらがなを覚えること）があるとすれば、この類に属するであろう。

第三の部類に属するものとしては「汽車ごっこ」「えんそく」といった類のものをあげることができよう。そのほか、「端午の節句」「ひなまつり」「うんどうかい」といった類のものもここにいれるのがいいと私は考えている。実際に子どもが経験している活動そのものの中心なものか、いくつかの一連の活動を総括したものを、主題にするわけである。

第四の部類は、いままであげたものよりも、性格があいまいである。「梅雨」のような主題がまずこれに当るであろう。梅雨は、目標でもなければ、それを学習する内容でもない。やや、「活動」と似ておるし、関連はあるが、一連の幼児の生活経験の背景にあって、目標や活動を支えたりいろいろとつたりしているものといえるであろう。

こうしてみると、一つの園で、あまりにも無雑作に、いろいろなちがった種類の主題をずらりとならべているのにびっくりするであ

ろう。私はそれを悪いというのではないが、無反省に雑然とならべ  
ていることに気が付き、そして、それなりに、適切な理解と実践につ  
とめるようであってほしいと思うのである。

実は、日本の園ではあまり見受けられないが、もう一種類ありうると  
思う。それは、幼児たちが、それをきっかけとして活動を展開しは  
じめるいとぐちになるような、機会になるようなものを、単元の名  
前にすることである。たとえば、「私の人形」のようなもので、こ  
れは目標でも活動でもなく、また、私の人形のことを勉強するので  
もない。はじめはお人形あそびをしてから、自然にほかのさまざま  
な活動をひろげていくのである。

#### 四

こういうような分析をすることは、分類自体に意味があるのでは  
なく、性格のちがう単元では、それに応ずる、ちがった考え方やく  
ふうが必要であるということをいいたいのである。

大ざっぱにいえば、普通の常識的な考え方では、学校教育を構成  
している単位は、知識や技能の内容のまとまりである。世人もそう  
考えるのが普通であるし、上級の学校にいけばいくほど教師の考え  
も、そういう方向に傾いている。そうした風潮を私たちは無視する  
ことはできないし、幼稚園でも、時の記念日を中心にして「時計」

といった単元をたてる向きもあって、それを全く排斥することはで  
きない。要は、「時計」のことを幼児たちにわからせるにしても、  
幼児に可能な範囲で、適切な目標のもとに、適当な活動をしくむよ  
うに、十分にくふう研究する必要がある。こうした主題をたてるこ  
とが、ふと気がゆるんで内容をじかに押しつけるような態度におち  
いりがちになるから、気をつけなければならない。

ところが、近代的な教育のやり方では、内容はある程度自明のこ  
ととしておいて、どういう具体的な活力において、そういう内容や  
ねらいなりに到達させるか、ということが前面に出てくるのであ  
る。端的にいえば、「単元」で指導をしていくというときの「単元」  
は、そもそもがこうした活動を前面に打ち出してきたときの、活動  
のまとまりをいうことばなのである。したがって、こうした、幼児  
の自発的な活動を重んずるような考え方の場合には、第三種の単元  
や主題が多くなり強くなるのが自然である。前述の「内容」を主に  
した主題のたて方が固定的で押し付けがましくなりやすいのと反対  
に、この種の単元は、活動はゆたかにいりどり多いものになるとと  
もに、うっかりすると、はっきりした目標を達することをなおざり  
にしたり、ふわふわとした中味のものに、触れさせただけにとどま  
る、という非難を招きやすい。いいかえれば、この種の単元の場合  
は、その活動をつらぬく方向としての目標や、あとに積み重なって

残る内容などについて、しっかりした考え方と実際のやり方が具わらねばならない。

ところが、このごろはどんな場合でも、「目標」のことをやかましくとりあげ、目標のことをいつもひきあいに出すようになって、ことを読者もよくご存じであろう。固定的な内容と、流動的な活動と、いずれにもとるところはあるが、ともすると偏りやすいので、そのちょうど中間にあつて両方の特長を具えているような目標をおもな手がかりとして教育のことをやっといこう、という考えも、こうした勢いを生み出した、といえるであろう。教師が内容を主として、活動をもとでも、そのねらいをあやまらないようにすべきであるし、活動をこどもにたのしませて、常にその奥に、向かう方向を見失わないようにすべきであろう。

私も、個人的な立場をいえば、やはりこうした目標を中心に考えていく態度が、いちばん穩当であると思う。幼稚園教育要領の各領域にわけてあげてある「のぞましい経験」の一つ一つは、教育内容ということにはなっているが、よく一つずつ性格を調べてみると、私のいう内容よりも、むしろ目標の性質をもっているものが多いようである。すなわち、「皮膚・髪の毛・つめなどをきれいにする」という項目も、皮膚の美容をじかに教える美容院のようなとりあげ方ではなしに、子どもたちと生活をともにしている間に、折にふれ

てそういう欠陥をこどもたちにわからせようという目標的な性格をもつものとして理解されねばならない。

二週間なり一月なりの、園における幼児の活動の全体を「たのしい幼稚園」や「じょうぶなからだ」のような中心目標で覆うようなやり方も、やはり、いろいろな点について気をつけなければなるまい。いいわるいは別として、それだけでは、こどもたちに生活させる内容や、どんな活動をさせるかは、はっきりしない。だから、こうした漠然たる大目標を主題としたときには、細密な具体的な活動や内容に關してのくふうが必要となるのである。

第四種の「梅雨」を内容や活動などと思ひあやまらぬことも大切であろう。もっと具体的に、はっきりした目標・活動・内容についての計画や反省が必要であろう。

さらに、一つの単元名で、二つや三つの性格をかねているのがあつても事實であるが、要は、単元の名のつけ方が、どうしても偏りがちのものであること、名前のつけ方が、すなわち、まとめる際の中心が一方に偏っているからには、常に、その足りないものについての反省やくふうが必要であることをいいたいのである。

(お茶の水女子大学)

\*

\*

# 幼稚園の意義と 教師の資格

L・W・ベンナー

津 守 真 訳

今回はまず、子どもを幼稚園に送る理由から考えてみることにいたします。そもそも幼稚園は、家庭教育の不足を補うものではないですが、それにとって代るものではありません。家庭でなければ与えられないものがあると同時に、幼稚園では家庭で与えることの出来ないものを与えることができます。中でも重要なものは、集団生活に参加することにあります。子どもは幼稚園に通うことによって集団生活に参加し、それによっていろいろな経験を積んでいきます。

- 1、同年令の子どもと遊ぶ経験。
- 2、自分より力のある人をうけ入れる経験。

すなわち、成人、目上の人、えらい人を敬意をもってうけ入れることは、社会のいろいろなところで経験しなければなりません。子どもたちは幼稚園の先生に接することによって、このような態度を育てていくことが出来ます。

- 3、系統的に、そしてまた偶然の機会に学習する経験をもつこと。

系統的にというのは、幼稚園ではカリキュラムがあり、プランがあるからです。偶然の機会にというのは、あらかじめ計画していかないのに、子どもにとっては、よい学習の機会が豊富にあるからです。

そしてこの経験は次のことを可能にいたします。

4、子どもの生活に規則をもたせることが出来る。

更に、

5、次にくる小学校生活の快い手引となる。

子どもは幼稚園に通うことよって幼稚園でこそ味わえるような楽しい暮しをいたします。時には、「できるだけ長く自分のひざの上においておこう」と言う両親をみかけますが、それでは、親が、子どもの幸福な楽しい生活を奪ってしまう結果になるので、音をたて、歌をうたい、庭で遊ぶ——何と楽しい生活でしょう。このようにして幼稚園で楽しく暮すことは、やがておとずれる小学校生活の、この上もないよい手引です。

6、家庭で与えることの出来ない材料を与える。

子どものための遊具をみますと、たとえ各家庭で与えることが出来たとしても、子どもは大きくなるので、すぐに使えなくなってしまう。けれども、幼稚園では、同じものを毎年違う子どもに与えていくことが出来ます。また、幼稚園には、子どもが自由にかけ廻ることのできる遊び場所があります。日本では必ずしもそうではありませんが、ニューヨークをはじめ、合衆国の多くの都市では、全く遊びの空間がないのです。それでも幼稚園にすれば自由に遊べるへやがあるのです。

7、幼稚園に行けば、訓練された先生によって指導をうけることが出来る。

家庭では、どこの家でもいきとどいた指導をするということはなかなかむずかしいことです。ですから幼稚園の先生になるのは、その期待にそうべく、自ら、教師としての態度を養うべきでしょう。

そのためには、幼稚園教師の誰もが最小限、理解しておかなければならないことがあります。これはたいへん重要な問題ですが、ごく平均なみの子どもを頭において、次の四つの点をあげることが出来ます。

1、子どもたちの成長・発達には規則と順序があるということ。

これはすべての先生の最低必要な知識です。

2、普通の子どもは、どれくらいのことを学習する能力をもっているかということ。

私どもは、子どもたちにその能力を越えたむずかしいことを与えてはなりません。また、やさしすぎるのも妥当ではありません。発達を助けるような適切な程度を是非つかんでおきたいものです。

3、子どもの学習は「遊び」を通しておこなわれるのだということ。

子どもたちが幼稚園から帰ってくると、よく母親との間に「お前、きょうは何を勉強してきたの」「何にも勉強してこないよ」などという会話が交されます。けれども幼児においては遊びの中で社会生活に必要なことを会得していくのですから、あわてることはありません。

#### 4、子どもたちは、個人差が大きいということ。

したがってすべての子どもに同じことを同じときに与えるということは不可能です。以前、私は、同じ服を着て同じような顔をした一卵性双生児の興味が、一方は機械的な事柄に、一方は絵や音楽にむけられていたというお話をしたことがございました（五十七巻第六号）。このような個人による違いを私たちはみつめなければなりません。

#### もう一つ、よい幼稚園教師に必要な特質をあげましょう。

幼児の時代は、周囲のものから強い印象をうけます。ですから殊に、子どもと一しょにいる先生は重要な存在です。先生がどういうふうに行動し考えるかということは大切なことですが、それのみでなく子どもたちはそれをまねします。それ故、幼稚園の先生は子どもによいお手本を示す人でなければなりません。かつて私が幼稚園の先生をしていたときのことです。ここでは、人に何

かたのむときにはいつも「プリーズ」と言うようにさせておりました。幼稚園でそういう習慣にしておく、子どもは家にかえて家の人がそれを言い忘れたりすると、子どもがおとなに注意をすることもあります。こんなことにも、あなたがたのすることが反映していきます。

幼稚園の先生は、他人とうまく折り合っていくことができる人でなければなりません。先生と子どもが、いつも親しい関係を保つていくことは申すまでもありませんが、そのみでなく、先生はしばしば家庭の人とつき合わねばならないからです。

先生は、いかにして自分自身の感情を統御するか、ということを知っている人でなければなりません。先生自身が、おちついた、安定した情緒生活のできるとき、子どもも自分の感情を押しえていくことが出来るのです。

先生はまた、責任感の強い、信頼のおける人柄でなければなりません。

公平で、人を偏りみないということも大切です。すべての子どもは違っていますから、違うようにみなければならぬのです。が、平等に扱わなければなりません。

非常に忍耐強い人でなければ、真によい先生にはなれません。実習生たちが幼稚園で保育をいたしますと、「あーあ、本当にく

たびれてしまった」と申します。しかし、これを自分の仕事として毎日おこなうのですから、大きな忍耐をもつ人でなければなりません。

最後に申しあげたいことは、先生というものは、外からも快くみえる人、礼儀正しい人、そしてよく振舞える人であってほしいと思います。美人ということではありません。心がよければ美しくみえるものですから。

子どもたちは先生ゆえに学び同時に先生について観察してきます。まだ社会的に十分成長しておりませんから、感じたことをこゝとばでは表しません。けれどもとてもよく気をつけ、感じ、意識しているものです。

私のへやは窓からのぞくことが出来るようになっておりまして。ある子どもが

「おいみんな、先生はきのう着ていた服と同じ服を着ているよ」と言いました。たしかに同じ服を着ておりましたが、私は自分では少しも気づきませんでした。子どもたちはきのうの先生を覚えていたのです。

また、ある会合に出席するために、私は、おめかしをして羽根のついた帽子をかぶっておりまして。ある子どもにも道で会ったので、サヨナラをしました。そのとき

「先生、その帽子はどこで買ったの？　ばかみたいな帽子だね」と言いました。帽子をみているなどと思わなかったのですが。翌朝その子どもは登園すると「おはよう」も言わないで庭へ遊びにとび出していきました。そして通りぎわに

「先生、ゆうべ髪を洗ったんだね」と言いました。

こんなことがあるのが幼稚園の先生の生活です。よくお母さんたちは

「うちの子どもは幼稚園から帰ると、何をしてきたのかはちつとも言わないが、先生がどんな服を着ていたかということだけは毎日ちゃんと言うのですよ」とおっしゃいます。これは決して子どもたちが幼稚園をないがしろにしている、ということでお話したわけではありません。先生がどのように振舞うか、どのように子どもに接しているかということが非常に重要なことを話したわけです。

皆さまががよき先生として、心から満足し、すばらしい時を送れますように願っております。

(米国、マウント・ホリヨーク大学教授  
一九五八年二月―八月お茶の水女子大学児童学科講師)



# マウント・ホリヨーク大学

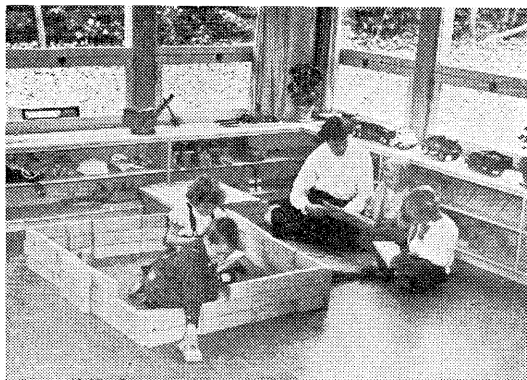
## 付属幼稚園

L · W · ペシナ

これは米国マサチューセッツ州のマウント・ホリヨーク大学付属幼稚園の写真です。私は、この幼稚園の園長をしています。私が日本に来たので、先月、学部長が送ってくれたものです。

この幼稚園は、一九五二年に新築した園舎で、木造平家建、保育室は、二室あります。これは大学付属の幼稚園ですから、保育室のほかに、観察室、実験室、テスト室、相談室があつて、児童研究のために使用されます。調理室があつて、おやつが出せるようになっていきます。コンクリート造りよりも、木造の方が安いので、木造にしました。

下の写真は五才児の保育室です。この積木は、一番ふつうに使用されている形の積木です。これも、市販のを買うと非常に高価なので、大学の木工さんに木を切つて削ってもらいました。この子どもは、いま家をつくっているところですが、積木で家をつくるやり方も、日本の子どもと大分違いますね。アメリカでは家をつくる時には、ブロックや煉瓦をこのように積み重ねて、最後に屋根をのせるのです。

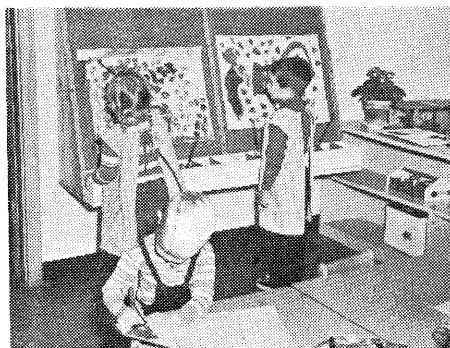


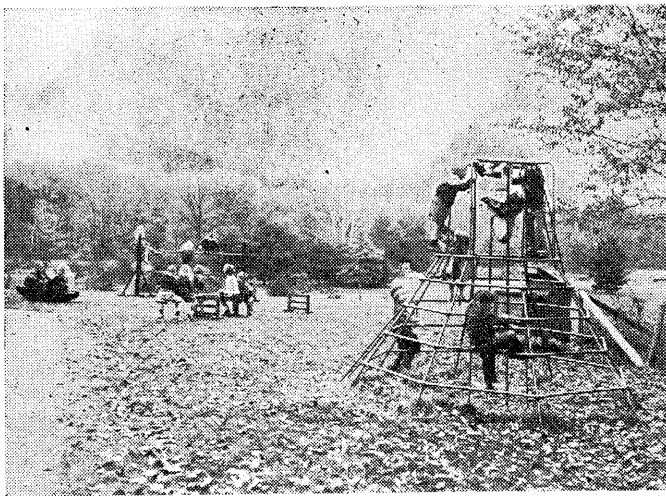


上の写真は、子どもたちがへやの中で、思い思いに遊んでいるところです。一つのへやの中で、いくつもの活動ができるようにと考えています。

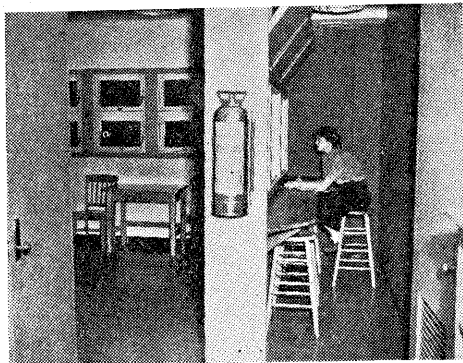
下右の写真では、子どもたちがピアノのまわりに集まって、歌を歌いながら、楽器を使っています。できるだけ自然な形で、音楽を楽しむようにと心がけています。

下左は絵を描いているところです。

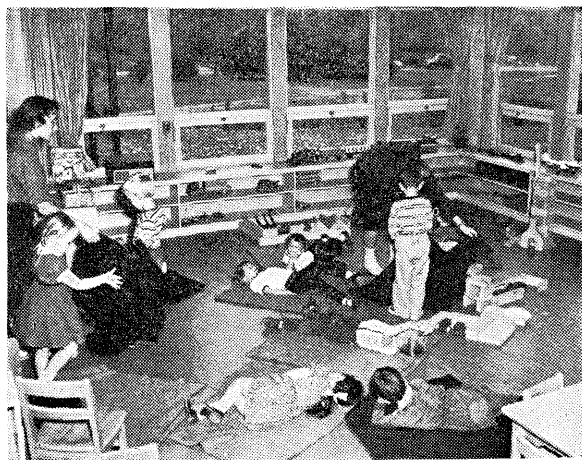




左上の写真は、戸外の遊びです。遊具を使って楽しく遊んでいるところをみて下さい。幼児は日本でもアメリカでも同じです。日本の幼稚園に半年来て、明るく幸福そうな日本の子どもたちをみて、私はたいへんたのしくなりました。子どもを大切にする国は、繁栄する社会だと思えます。



左は、観察室の内部です。観察室は、特殊なガラスが使っており、もちろん向こう側からはみえません。研究用に使用します。



右は、おひるねの時間です。みんな勝手な姿勢をして、休息します。

×  
×  
×

# 子どもの経験を生かして

—— 経験、活動、そして、創造的ということ ——

片岡 靈 恵

外国の教育関係の人々に、よく聞かされた用語に、*Experience*、*Active*、*Creative*、*Activity*、*Activity*、それに、*クリエティブ*がある。一時は、この三語さえ繰り返して使っていたら、新教育のすべてが論じられるかのように思われたほどである。私たちが毎日、心身を傾けている保育の仕事に、子どもの経験を生かしているだろうか、また、どのように生かしたらよいかという問題を考えるのに、私は今、この経験ということ、活動、および、創造的という二つの事柄との連関において捉えてみたい。

教育のカリキュラムが、児童の生活経験から出発するべきか、または、教師が与えたいと意図するところの教課内容を中心とするべきか、の問題はさておき、私たちの日々の保育に、子どもたち自身の経験から学ぶところは数えきれない。私たち指導者は、実には、教える者であるより先に、教えられる者である。

殊に、幼ない子どもたちの一日一日は、新鮮な「おどろき」でいっぱいである。あの小さな身体は、好奇心のかたまりである。どん

なに小さな草の芽の出現をも見逃さない。あの、キラキラした眼の輝やき、動くものがあれば、直ぐに近づき、触って見、うごかしてみ。小さいけれども絶えずよく働く彼らの手足と感覚。子どもたちは、こうして新しい経験を積み重ねながら生長してゆく。そればかりでなく、時代の進展に伴って、現代の子どもたちの住む世界は、私たち自身が、かつて経験したものとは、大分異なっているようである。私たちは、すでに、子どもたちにとっては、何でもないような普通の経験の内容が、理解出来ずとまどう場合にしばしばぶつかるのである。

しかし、私たち保育者の多くは、幸い、子どもの生活を愛情をもって見守り、彼らの経験を、畏敬の気持ちをもって受けいれる広い心がまえをもっている。常に、子どもの傍らに立ち、彼らの生長を助ける土壌をつちかうのが私たちの仕事であると思う。たとえ、子どもたちのすべてを理解し把握することは出来なくても、そうしようと努力し、いつも、自分を白紙にして、まず、子ども一人ひとりを、受

けとめてやろうとしていけば、彼らは、いつも、ありのままの姿で私たちの胸に飛びこんで来てくれるのである。

ところが、私たちは、ときどき、おどろくということをお忘れて、なま温かい、いわゆる幼稚園らしい空気の中に安住してしまふ。火花を散らすような、真剣な、子どもたち相互のぶつかりあいに気付かず、そこに溢れている生命力のほとばしりを汲みとらず、おとなの（多くは、若い女教師の）センチメンタリズムに、自己満足してはいないだろうか。倉橋惣三氏がよくおっしゃったように、幼稚園に、子どもの匂いがしない、幼稚園くさい匂いが立ちこめていないだろうか。子どもの世界は、たしかに未分化の、夢の世界である。しかし、子どもたちの夢の国、（殊に、現代の子どもたちのすむ世界）は、私たちおとなの想像することも出来ないほど、広く、複雑な色彩と構図をもっていると思う。

では、私たち保育者は、どうしたらよいだろうか。あまりにも生きいきとした子どもたちの生活を見つめれば見つめるほど、自分自身がいかかにみじめな、不自由なおとなであるかに気づくのであるが、さて、そこから、どのように立ち上がったらいだろうか。私は、ここで、子どもの経験から学びとった学習活動——アクティビティー——に救いを求めたい。子ども自身の多くは意識していない、いわば本能的な諸経験は、教育的に計画され指導された学習活動によって、豊かになり、深くなっていく。幼ない子どもの経験は、放っておけばはかなく消えてしまうように淡いものである。そし

て、それらの多くは、小さな日常の出来事である。けれども、このような小さな表現をとらえて、その子どもの全身全生活を感じし、それを更に、積極的な活動にまで誘導するのが、新しいカリキュラムのあり方であると思う。その形式は、言語や音楽リズムによる表現になることもあるだろうし、造形活動や、集団行動において發揮されることもあるであろう。そして、その具体的な形は、私たちが、多少とも、伝統的に引きついでいる、いわゆる、保育カリキュラムとは大差のないものであるかもしれない。しかし、私たちの計画する学習活動が、子どもの経験を生かしたものであったら、それは、もう少し創造的な、しかも具体的なものになってくるのではないだろうか。非創造的な、抽象的な私たちが生まれるのではなくて、何物にもとらわれない自由な子どもたち自身が私たちに与えてくれるものこそ、教育のカリキュラムを推進する力であると私は考える。

幼児の教育は創造的でありたいとの願いもここから出発する。子どもたち自身、吸収すること以上に、内から創り出す力をもっている。私たちおとなには、すでに、内から創り出しているこの創造力は、子どもの具体的な活動経験を通して引き出し学びとるよりほかはないが、せめて、この努力をすることにによって、保育のいとなみが、創造的なものになるのではないだろうか。子どもの経験を生かしたクリエイティブ・アクティビティー（創造的活動）こそ、子どもの生活を充実し、その生長を促進する大切な要素の一つであると思う。

（平安女学院短期大学）

# 幼児の経験を生かして

菊地正子

昨年の春、親から離れ不安そうな顔で呼ばれる自分の名前に返事をするのが精一杯のようだった幼児たちが、元氣な明るい顔で蜂の巣をつついたような騒ぎをしているきょうこの頃です。この間の身体、精神両面の発達は、全く著しいもので、心理学の本などで学んで知ってはいても実際に自分の記録を見直して、一人ひとりの環境と経験が各自の健康、社会性、知性、情緒の成長に有機的な関係のあることに改めて驚かされます。

今、これを言語による表現活動をとりあげて考えてみましょう。

幼児のことは、幼稚園に入る前、今までの自分の生活環境の中ですでに感情の表

現、欲求、思考などを他人に伝え、他人に理解され、また他人のことは聞き理解する為に「はなしことば」として活用出来ています。ところが新しい環境の幼稚園に入つて、種々の異なった経験と環境の見知らぬ幼児と先生に会い、途端にうまく活用出来なくなつてしまいます。例えば、「御不浄にいくこと」にしても、Rちゃんにとつては「ジャージャーをすること」であり、Oちゃんにしてみれば「チーチャマをすること」であるので、今までの生活経験にはないことばであるわけです。しかしこれはまもなく、「ジャージャー」や「チーチャマ」が「御不浄」になり、だんだんに今までのことばの活用をとりもどし個々の間に「は

なしことば」として働きを持つてきます。ところが集団生活で大勢の仲間の中で自分の気持ちをたっぷり伝えたり、情緒、思考、経験を表現することは、今まで自由に使われていた「はなしことば」のようにはいかなくなりません。

入園当初のHちゃんの話は、「自転車にのつたの」「本を読んだの」「デパートにいったの」と一つの文章にはなっているが非常に短い経験の表現にしかありませんでした。

年少の前半は級全体がHちゃんと似たような言語表現で、遅々として伸び悩んでいる格好でしたが、環境になれるにしたがつて、言語、思考の発達は身体発達にともなつて、年少の後半から年長の前半に入ると、日々変化を感じさせるように伸び始めました。こうした時期にHちゃんの言語発表は次のように変化していきました。

「あのね、お母さんと松阪屋にいつてね、食堂でね、お子様ランチ食べたの。旗が立

つてるのね。あれね。あのね、三階かな、エスカレーターでいってね、Tちゃんの洋服を買ったんだよ。」

こうして、短い文章からだんだんに長いまとまった話を、自分の経験を通して話せるようになりませんが、まだ幼児の特徴としての自己中心性が強く押し出され、一番印象の深い食堂の事が最初に出てきており、話の筋道が通っていません。また、その時の幼児の心の動きが話し方によって十分に感じさせますが、こうして文字として現わすとわからないように、情緒がことばとして表現されていません。

春の連休を利用していなかへ行ってきたHちゃんは、級の皆にはずんだ声でこういう話をしました。

「あのね、いなかへいったのね。そうしたら家の前に小屋があったのね。山羊がいたのね。山羊の赤ちゃんが生まれてね。まだよちよちでよく歩けないのね。かわいいのね。」

また夏休みの近い日、Hちゃんの妹が入院した時の話です。

「T子が病院にいったからね、お母さんがついていたのね。子どもはいっちゃんいけないのね。『おりこうね』ってね、賞めてくれたんだよ。」

山羊の赤ちゃんをすぐそばではじめて見た経験はHちゃんに「かわいいね」と山羊に対する愛情を、また妹の入院の間の母親のいない不安と悲しみの経験は「寂しいけどまんした」と共に情緒をことばに表現してくるようになっていきます。その上、山羊の場合は「よちよち」という形容を、後者の場合は自分以外の人のことばをも挿入してきています。そうして話の内容も前後せず、文章の構造も次第に秩序だつてきました。

そこで今度は生活経験の発表を土台として幼児の創作にと発展させていきました。創作しやすいように身近な材料として「おーちゃんのいたずら」という題を示してみ

ました。この一つの同じ題に対して環境、経験の異なった三人の幼児の創作は興味深く感じられました。

先のHちゃんは「幼稚園のお預りのこまを持って来てお辨当の時にくるくるまわして、お家へ帰ってお母さんが『ごほんよ』っていつてもこまをまわして、くたびれていねむりしてたの」と話しました。

三人兄妹の末っ子Mちゃんの家は非常に忙しい商店であまり面倒をみられないらしく見受けられ、幼稚園では人の見ているところではすました良い子ですが、人のいないのを見ますと、何もしない弱い児をボカッと通りがかりにぶつていたりするのをよく見かけます。そのMちゃんはこういう話を作りました。

「おーちゃんは幼稚園であんまりいたずらしたから先生にピンタをとばされたんだって(ピンタってなんだ)とまわりから声がかかりました。お花なんかだまって取ってお母さんに叱られて泣きながら寝ちゃった

って」

Kちゃんはひとりっ子でおおぜいのおとなに大切にされ豊かに思うままに育ちました。おとなばかりの環境なので日常の言語もおとなのようで級の中に「テレル」とか「やじ馬」などということばを流行させました。

そのRちゃんの創作です。「おーちゃんはいつも喧嘩ばかりしていたの。とつくみあいしてこうやって(と、隣りの子の首を持ってねじ倒そうとすると『プロレスじゃあないぞ』とやじられました。)首なげをしました。幼稚園で遊んでいて、帰る時なかなか帰らなくてお母さんが迎えにきてひっぱって帰らせて、家に帰って『昼寝をしなさい』って言われてもねなくて、木に棒をぶら下げて剣道でポカンポカンやっていたんでお母さんが連れて来てとうとう昼寝させられたんだって。あの日『悪いことをしたなあ』と思って『もうしません』と悪いことをしなくなりました。」

以上の三つの創作の話を考えますと、文章の構造では、自分の生活経験の発表で見られた情緒、思考の表現力が筋を作ることにとられて少し崩れていますが、ことばのおもしろさが現れてきています。この創作ももちろん、生活経験や環境と全く別個なものでなく、おーちゃんやねずみや象に託した自分の種々の経験―自分の実際にやったこと、やってみたいこと、友だちのやっていたこと、聞いたことなど―をおり混ぜてまとめられたものです。

## 日頃感じたまま

吉 江 紀 子

幼児の生活経験が、そのまま経験で終わってしまうのではなくて、それが幼児期における人間形成の基礎を作る上に大きな位置を占めている言語という一つの表現活動に生かす為には、その良き場を与えることによつて、幼児の思考も、情緒も、社会性も、自分のことばで表現し、自分なりの一つのものとなり活用されていく間に経験が自分のものとなり活用され発展していきます。

(東京・芝幼稚園)

卒業してもう三年、今年三月、私にとつてはじめての卒業生を送り出して、現在は、二年保育の級で、毎日を夢中で過ごし

ております。改めて考えてみますと、この小さな人たちとのつながりの中で、どんなに多くのことを教えられているか、ふだん



見過ごしている場面にも、考えなければならぬ問題が含まれていることに、今更のように気がつきました。

二学期もなかなば、遠足、運動会と、行事も多く、子どもたちの生活は、一段と活発になってきました。話し合いの機会も多く、いつも、ハイ、ハイ、と勢よく手が挙がりません。級は三才組からの人が、半数以上ですが、新学期当時から、二、三人のほかは、皆の前で喜んで話せました。二十二号台風の翌々日でした。「皆さん元気で来られてよかったですね。でも、お水がたくさん出て、心配したお友だちの家もあったのよ」と、話し出しますと、「先生、先生、私の家の中で、お水が入って来ちゃったの」と、話し出したのは、これまで、自分から大きな声を出したことの無いN子ちゃんでした。皆も一せいに注意を向けます。「どんなにたくさんでした？」と、真剣になりますと、少しはかみながらも、「こちらへんまで。それでお母様、たたみを干してい

るの」と熱心に話し続けました。大きな出来事に出会って、強い印象を受けたことが、N子ちゃんの口を自然に開かせたのだと思います。これがきっかけになって、その後、らかな気持ちで、皆の前で、話すようになりました。子どもたち自身の新鮮な驚きや、感動に、心から共感して、それをひきだす機会をとらえることが大切だと思いました。一対一ではよく話せるのに、やはり、話し合いの時となるとしりごみしてしまうSちゃんにも、らかな気持ちで話せるようにしてあげたいと思い、ふだん、たのしそうに話してくれる家族のことから、きっかけをみつけるように心掛けています。

幼稚園の庭の柿の実が色づいてきたことから、実りの秋の訪れを話し合い、実際にも見られるように、いろいろな果物を、部屋に置いておきました。枝のまま花瓶にさしておいたざくろが、珍しらしく、早速、そのまわりに集って、「おいしそうね。これ本当にたべられるわよ」「ちよっとた

べてみようか」と、今にも口に入れそうでした。そこで相談して、食後に、皆でいただくことにしました。「先生のお庭になっていたざくろよ。どんな味がするかしら」皆まじめな様子で、そろそろと噛んでみて、「すっぱいわ」「少しがいい」「甘いよ」など、終には、「ああおいしかった。もっと欲しくなっちゃった」と言いながら、いとも満足そうな顔つきでした。観察といっても、見たり、味わったりする知識的な面ばかりでなく、みんな話し合いながら、楽しく過ごす雰囲気も、忘れないようにしたいと思いました。

先学期から飼っているかめも、興味的になっていきます。そろそろ冬仕度で、砂の中にもぐりこみ始めたので、冬眠のことを話しますと、「その間、何もたべないの？」「かわいそうに」などと言っています。ある日、ひよっこりと、また砂の上に出て来たのをKちゃんがみつけて、大騒ぎです。早速そばに行ってみます。「先生、

私のお弁当の玉子、あげようかしら」「目をつぶっているわ。やっぱりねむいのよ」などと話し合っていますと、次々と、皆も寄って来て、長い間、のぞいていました。お昼には、我も我もと、餌をあげようとなりました。このように、誰かが、関心を示した時、ちょっとの心遣いで、全体の興味をひくように仕向けることが出来るのを、実際に知りました。皆で、無事に冬越しさせようと、はりきっています。

良い生活習慣を身につけるには、毎日の心掛が大切です。お弁当の仕度も、なるべく早くきちんと出来るように、一番始めに、用意の手順を、はっきりのみこめるように、よく説明します。それこそ、バスケットの出し入れから、お弁当とお箸を並べて、袋や紙をしまうことまで、一人ひとりみて歩きました。数日間は、ゆっくり時間をかけて、全部が出来るのを待ちました。するとそのあとは、スムーズに運べたようです。けれども、こちらが気がせい

り、二、三人でも、うまく出来ないままにしておくことが続く、その周囲の人たちまで、くずれてきてしまいます。用意の遅くなりがちな人には、目立たないように声をかけた、  
「皆さんが待っていますよ」と、周囲の中の自分の状態に目を向けるようにしてみました。すると、ゆっくりではありますけれど、自分で気付いて、しようとする気持がみえてきました。こういうことは、はじめが大切なこと、根気強い態度が大切なことを知り、先を急いで、つい叱言がましい口調になってしまうのを反省しています。

食前食後の口をゆすぐことにしても、はじめは、皆が一しよに並んでいって、うがいをし、定められた所にコップをしまうことを、毎日くりかえしました。そのうちに、何の負担もなく身につけていききました。もうすっかり習慣になっていて、時々忘れても、「○○ちゃん、ほら、うがいするのよ」と、お友だちに言われて、やって

います。これを見ても、生活習慣をつける上で、集団生活が、いかに大きな役割を果しているか、がわかりました。

はじめてマーチを弾いた時、子どもたちが、何となく歩きにくそうで、元氣のないことに気がつきました。どうしてなのか、その時はよくわかりませんでした。が、後になって、弾き方と、テンポの悪かったことが原因だったと思ひあたりました。マーチの場合に限らず、子どもたちは、リズムやテンポと同時に、弾く人の気持に、とても敏感なことを知りました。いくら譜面どおりに弾けても、子どもたちはリズムのつてきません。一番大切なのは、いつも子どもたちと一しよに動いているつもりで弾くことだと知りました。

毎日の経験を大切にして、それから多くのことを学びとる努力を忘れずに、子どもたちと共に、成長していきたいと思ひます。  
(日本女子大学付属豊明幼稚園)

# 子どもの世界と発見

木 島 陸 子

年長組になると病気のお友だちの為、災害の為などにかわいのお祈りがひとり出来るようになる。『きょうも一日みんな仲良く遊べますように』。そして皆で『このお願いを神様にお捧げいたします。アーメン』。心の底から出たこの子どもたちの素直な清らかな祈りこそ、最も神様がお喜びになるところのものであろう。何の知識でも自分で実習し、経験しなければ本当に自分のものとはならない。いわんや人生の生き方を教える神の深い真理は、自分の体験を通してはじめて心からわかるものである。子どもと共に祈り、子どもと共に学び、子どもと共に歩むことがキリスト教育の根本であらう。六月の花の日には、子どもた

ちが一本ずつ持ち寄った美しい草花を、礼拝堂に飾り、花の日の礼拝を捧げる。赤白黄、色とりどりの美しいお花の枝には「お花のように美しく愛の心をさかせましょう」というカードがぶら下っている。礼拝の後、全員で一本ずつお花を手にして近くの落生会病院や消防署、交番、車庫、病気のお友だちや、園児の家庭で最近産まれた赤ちゃんに小さな花束を子どもたちと一しょに持って行くのである。十一月の収穫感謝祭にも子どもたちが一個ずつ持ち寄った果物、野菜を飾り、収穫感謝の礼拝を捧げ、同じく病院や気の毒な子どもたちを收容している施設に持って行く。イエス様は「人にさせたいように人にしなさい。」とおっしゃっ

た。子どもたちは花の日や収穫感謝の日に経験したこと、あのやさしい美しいお心はいつまでも忘れることはないであらう。また、クリスマスと子どもの生活との結びつきも大きく、子どもたちは大きな期待と喜びをもってこれを経験する。このクリスマスの感激こそは、一生涯忘れ得ないものであり、大きな感激の中に学びとることは彼らの血となり肉となるのである。

自由遊びの時の子どもたちは思う存分に活動し、僕たち、私たちの世界であるとかかりに嬉々として戯れている。ある日の午後、滑り台からジャングルをお家にして坊ちゃんお嬢さんが交って七、八人で遊びだした。靴下やハンカチをジャングルにかけて洗濯物を干すと称する。時々おもしろい会話がもれてくる。『お母さんの靴下もたのみますヨ』。『お姉さんお出かけ？』。『あつ、お父さんロボットが家の中へ入って来ますヨ』。『さあみんなでロボットをやっつけましょう』。

「先生、ちょっと見に来て。」とTちゃん  
は眼を輝やかせて私の手を引張って砂場  
へ連れて行く。行ってみると、そこには大  
きな山がうねうねと作られ、木が植えられ  
道がついている。川には橋がかけてい  
る。「先生すごいやろ」。「先生、これ何山  
やと思う?」。「先生これはな、比叡山のドラ  
イヴウエイなんや」と四、五人が口々に言  
う。「ウワー、とてもいいの出来たのね」と  
思わず声が出たくらいの上出来であった。

しかし、その子どもたちが「こわさんとい  
てや」とへやに入っている間に、誰かによ  
ってこわされていた。Tちゃんはまた眼の  
色を変えて私を引張って行く。「○○ちゃ  
んたちが作ったお山、こんなにこわれてし  
まって……あんなに一生果命したのねえ  
……と一しよに歎いてやる。こわした子ど  
もがそばにいたとすれば、その様子を見て  
悪かったと反省するだろうし、民主々義社  
会の一員となる子どもたちに、自分だけよ  
ければという利己主義的な考えを自然のう

ちに無くしてゆきたいものである。また、  
子どもがちょっとでも良い事をした時は、  
十分にほめてやり喜んでやりたいものであ  
る。「毎朝、お母様に送っていただいてい  
たAちゃん、今日からは、もうひとりで登  
園出来るようになったのよ」。Aちゃんを  
前に呼んで強くなったと皆で拍手をしてほ  
めてやる。今まで消極的であった子どもも  
それから自信を持つようになるだろうし、  
良き方面へ成長する機会ともなるだろう。

毎日の生活の中で、子どもは種々な事を  
不思議に思い、自然界のちょっとした出来  
事にも、一大発見をしたかのように驚き嘆  
声をあげる。私たちはその心の動きを上手  
に捕え、とび込んで行かなければならない。  
子どもの経験を豊かにするということは、  
そうした動きの中に得られるのであるから  
である。

#### 「つゆの玉」

せんせい、きてみ、  
ちよっときてみ、

おもしろいものある。

それ、

このおすべりの上、

ずうっと

小さい小さい

水の玉

お日さまあたって光ってる。

子どもの生活は散文詩的であり、そして  
感情もまた、詩だとすれば、語る一人ひと  
りのことは詩である。

「わたしのうさぎ」

わたしのうさぎ、しんじやった。

さわってみたら、

まだ、

あたたかかったの。

でも、

おめめふさいで、

おとても

あしも、

まっすぐにのびしていたわ。

かわいそうに。

ある秋の日の午後、シーソーに腰かけながらたくさん散った銀杏の葉っぱを集めて、それをつないで首飾りのようなものを作った。

「あのお空からあのお空まで」

いちちょうのはっぱつづけたら、どこまでいくの。

いちちょうのはっぱつづけてみよう。

ずつとずつとつづけたら、

きつとみんながびっくりするよ。

あのお空からあのお空まで、

いちちょうのはっぱつづけよう。

楽しい一日の保育を終えて、子どもたちは帰途につく。帰る道にも子どもたちは多くの疑問を見出し、驚きの眼をみはるのである。

「白いくもさん」

のぶ子ちゃんの方の

あのお空、

ものすごうきれいやわ。

ほれ、綿みたいくも、

ほれ、みとおみ。

ほんまにあのおうたとおんなじや。

追いかけてこしてるみたい。

あれ、犬さんみたいなくもよ。

あのかもさん、

どこへいくの。

## 三才児の粘土遊びから

馬淵治子

今年の三年保育児が粘土にふれたのは入園してまもなくだった。みんなが自分のものとして自由にふれることが出来るように、それを各自の小箱に入れて与えた。こぶし大の油粘土をみいだした子どもは、は

経験ということは、事物の世界のことに限らない。神と人との関係、人と人との関係、人と物との関係から生ずるさまざまなことを、それからそれへと経験によって学ばねばならない。民主主義社会を担って立つ子どもたちの最も必要なことの芽生えを正しい方向にむけておかなければならないと思う。  
(京都・復活幼稚園)

じめてみるものに驚きの目をみはりながらもそろそろとさわっていたり、または「使ったことがある」という、ゆとりのある様子で、うれしそうにとびついていった。中にはほとんど一月あまりもロッカーの中に

寂しく放っておかれた粘土もあつた。その持主は、戸外遊びの楽しさに頬をかがやかせている運動量の多い男の子や、また新しい環境になれることがむずかしく、どんな遊びにも応じないで自分のざぶとんにべったり坐つたままの子どもであつた。そのよな子どもも、ときどき自分のロッカーを開いては「ここにある」と粘土の存在を確かめる動作をくりかえしているうちに、興味をもち始めるようになっていった。

この年令の製作は、皆が黙々として大きな塊を小さなものにちぎるといふことから始まつて、丸めたり細長くのばす運動が表れる。

ある時、元気のよい女兒が「先生、リング」と見せに來たのをきっかけに、出來たものを先生に見せるといふ氣持が出來て、つぎつぎといろいろなものを持つてくるようになった。手でギュッと握つていふうちに出來た波模様のものを「これ、ごちそうよ」とそつと掌を開いてみせるもの

や「先生これ」と言つて差し出し、うっかりごちそうになつたものが蛇であつたりして、驚く先生の姿に「きゃっ、きゃっ」と喜ぶようになると、何となく子どもたちの表情もなごやかに、うちとけたものが表れてほつとする。

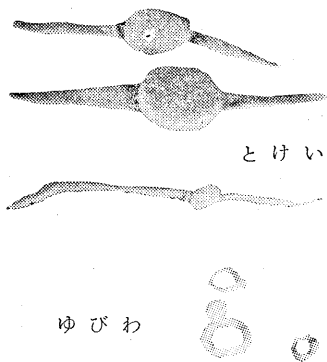
入園当初は、きまつて先生の腰のあたりにつかまつて離れない子どもたちの姿がみられるが、ぞろぞろとその子どもたちと一しよに、粘土をしている子どもたちの所を訪問する。出來たごちそうや首飾りは、あくまで自分と先生だけのものであつて、一しよにいる他の子どもたちは全く無視されて遊びの外におかれている。

最も生活年令の低いある女の子が「これ、ごんごよ」と何度もいつてみせたちぎちぎのものは了解に苦しんだが、のちにお母様よりごはんのことだと説明をいたゞき、他にもこの子どもの専用語がいろいろあることをうかがつた。

五月の雨の日、ふと、ひとりの子どもが

自分の粘土箱（およそ十種立方のもの）を両手で持ち、粘土の上からお餅つきを始めた。お餅に似た柔らかさと、ペタンペタンという心地よいひびきに、長い間楽しんでいううちに、次第に三人、五人と協調してリズムカルなお餅つきが始まつた。その子どもたちの表情は、顔を見合せ、声を出して喜びあい大合唱となつた。このころに、はじめて友だちの意識が生まれてきたように思う。

時の記念日にちなんで年長組が時計を作つているのをみたり、時計屋さんごつこを

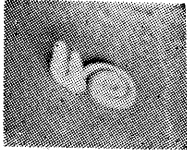


いけと

わびゆ

した思い出から、腕時計を作りはじめた。「先生の時計！」といって持ってきたものが小さすぎてあわてて「指輪にしよう」というくふうも出て来た。

保育室の飼育瓶にかたつむりが集り、黒板画も、八ツ手に這うでんでん虫にかえられた六月のある日、ふだんから口数の少ない女の子が「これでんでん虫」と、およそそれらしくない、くしゃくしゃのものをみせていた。そばでみていた男の子が「ちがうちがう」といって、早速自分の粘土で実演をはじめ「こうでしょう、でんでん虫は初めにつのを二つ作ってよけておくんだよ。それから細長い蛇を作ってぐるぐる巻いて、あとでくつつけるもんだよ」と得意になって作ってみせた。



なるほど出来ばえとしては立派なものがあったが、この子の作品が、絵にしてもい

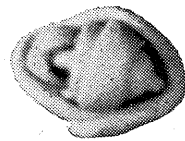
つも梓にはまった同じようなものにとどまっていることや、前の女の子が、無意識のうちにもさまざまな感情をこめて作ったものであるということを知り、個人の発達に応じた指導の大切さをしみじみ味わった。

夏休みも近くなると、偶然に出来上ったものの喜びや、それにくふうが加わった喜びがふえてゆき、おせんべいに爪のあとをつけて「胡麻入り」だといひ、指でつついて穴をあけ「ドーナツ」、二つ重ねたものは「ホットケーキ」だと変化にとんでくる。

さまざまな経験のあと、二学期から、粘土は要るだけたくさん使わせたい、大きいものを作らせたいと思ひ、大きな罐に入れて欲しいだけ用いることにした。今まで外遊びの激しかったある男の子が、一学期に個々に与えられた量の三倍も四倍も使って、二メートルもあるような太い蛇をつくり始めた。からだをのりだし、うんうんと言つて、両腕を使いこねる力強さは、小さな粘土板など目もくれずに、広いテーブル

いっぱいのにびていった。

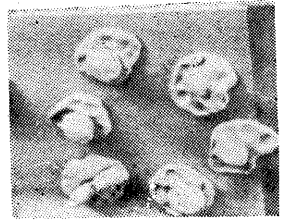
人工衛星



一学期頃にたくさん出来た蛇は、その応用変形として、バナナや、渦をまいた蚊取線香などになり、糸玉のように巻いて出来あがったものに、人工衛星と名づけた現代版も生まれるようになった。

園生活にもなれ、お友だちと遊ぶ楽しさを味わう九、十月頃になると、粘土遊びのうち会話に加わってくる。部屋の一隅にあるおままごとの粘土が出張するのもこのころで、自由に操作出来るごちそうは、まわらぬ口で「あじものが入っています」「胡椒を入れておいしくしましょう」などと話し合つて、母親ぶりを發揮している。粘土で作った果物やおだんごが、ままごとの道具と結びついてごっこ遊びに発展し、これが友だち遊びへさそい入れるよい機会と

ごちそう



なった。

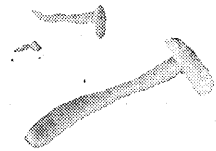
秋の遠足で行った自然動物園の思い出から、兎、あひる、ライオンを作るといったり、立体的な迫力をもつ船、自動車などを意識的につくり出す創造力のたくましい子どももみられるようになった。

また、このころになると、粘土を他の材料と一しょに用いるおもしろさを知るようになり、おだんごの串を要求したり、みどりの折り紙をちぎって大根の葉にしたり、棚の上においてあったざくろ、からいつのまにか粒を取って来て、首飾りのガラス玉に似せて美しい連鎖模様を作って楽しんでいく。そのほか「しいたけ」「くぎ」「ふうせ

あひる



かなづちとくぎ



ん」「かなづち」「たび」など、いろいろなものをつぎつぎと表現していく。

このように自分たちで見出した材料が創造に大きな助けとなっていることから、用途のちがった場において材料を粗末に扱うことのないよう指導して、適切な材料はいつもと与えたいと思った。

朝、勢いよく部屋にかけこみ、ドスンとおいたバスケットの下に粘土があり、偶然出来た波の模様に喜んだり、上靴でうっかりふみつぶした粘土に靴の型を見つけたなど、無意識のうちに出来る形のおもしろさを感じとっていることも見逃せない。

以上、入園以来粘土の肌ざわりが気持よ

く扱える季節をとりあげて、自由遊びにおける三才児の粘土遊びをみてきたが、粘土をみつめて手だしをしなかったはじめころの、あの固い表情もほぐれて、誰でも一度は手にふれてきたことは非常に興味深い。まるめたり、ちぎったり、たいたり、という動作のうちに、自然に何かに見えてくるといふ発見の喜びから、ある子どもは自分独特のものをつくり出そうとする態度に至るまで、その個人差はあっても、その時、その場の瞬間的な感情や思考が、興味によってつくられ、つぎつぎと浮かびあがる新しい考えが、各々の個性に応じた形を生みだしていることを知った。

したがって、出来上った作品の価値に捉われて判断することなく、楽しい遊びの雰囲気の中で、つくることよっていかに成長したか、いかに楽しんでいたか、を認めて、適切な賞賛と、励ましを与えていきたい。(日本女子大学付属豊明幼稚園)



# 入試と幼児

竹田俊雄



## (一)

十一月月上旬にとり扱った教育相談の一つにこのようなケースがあった。

東京のZ幼稚園児T（六才六か月男）について、母親が来談していうのは「このごろ遊ぶ時間がないようですが、どうしたらよいでしょうか」（話したことはのまま）というのである。たずねてみると、この家庭ではTをP小学校（仮名）という東京でもっとも有名な私立校の一つに入学させようとして、「テストの練習」をさせている。

月曜 幼稚園の帰りにR町（園より約二キロ半）のテストの「個人指導」（といっても、話によると、七・八名の幼児が来るとのこと）をしているところへ行き、二時間「アチーヴ式」で練習する。

火曜 幼稚園（保育は午後一時半まで）に残って午後三時ま

で「アチーヴ式」テストの練習（園から自宅までは約二キ

ロ弱）。

水曜 幼稚園にいら残り練習（火曜と同様）。

木曜 R町の個人指導（月曜と同様）。

金曜 特に練習をしない日。

土曜 午後家庭に「テストの先生」が来て、一時間「アチーヴ式」の練習。

日曜 午前に一時間、土曜と同様に先生が来て練習（四ページ  
することにしている）。

P校の入試まで、あと一月とないのであるが、どうしたらよいかという最初に述べたような奇妙な主訴である。

他に形容のしようがないので奇妙ということばを用いたのであるが、入試の歯車の中にまき込まれてしまった子と母の実に当然な訴えであるともいえる。私たちは普通の公立の小学校へ進むことも、

私立や国立の小学校を選ぶことも、親の自由であると考えているが、こういう親たちにとっては、そうでなくなっている。P校へ入りたいというTの親ばかりではない。他の私立のG校、F校、国立のE校、S校その他もろの「特殊小学校」を望んでいる親たちは、それを愛児が社会へ出るためのベルト・コンヴェーヤーと考え、動きのとれない考え方をしている。考え方というよりは、コンヴェーヤーからはずされた場合の不安の情緒に圧倒されてわくづげされた態度といった方が適当であろう。

「××校に入学させたいと思いますがそれだけの力がありますでしょうか」という親に、私たちは子どもの知能や性格的な特徴などを調べる。そしてそれが不適當と診断した場合、入試というのは好むと好まないとにかかわらず選抜試験であり、お子さんの現実はその水準からかなりへだたっている、容易に変えられるものではないから、他の進路に向かった方がよいと懇々と説くと、それをいちいちうなずいてきていた親が腰をあげかけながら「それではどう導いたら××校に入れるでしょうか」ときき返して、今まで話した長い時間が全然むだであったと感ずることがしばしばあるのもこれである。

特殊小学校入試の季節は三月ではない。入試は前年の十一月からはじまっているし、その入試に幼児の生活がかきみだされるのは、その一年も前から、場合によっては二年も三年も前からで、ある一部の子どもたちにとっては、幼稚園期全体が入試の季節とさえなっ

ている現状である。

## (二)

今、手元にある「文部統計速報」から、このような「特殊小学校」がどのくらいあるかを調べてみよう。厳密に考えると、こうした親たちの希望の対象とならない性質の学校もこのうち若干はあるが、大体全国で国立小学校七五校、私立小学校一五六校（昭和三年五月一日現在）というのがこれにあたる。そしてこれらの小学校の一年に入っている児童数は、国立七、四一七名、私立七、六八九名であって、計一五、一〇六名となり、この数は同年小学校に入学した全児童一、九七八、一四八名の〇・八パーセントに達していない。

問題は、入試を受ける幼児の実数なのであるが、これは統計的には把握しがたく、個々の特殊小学校の志願者数が入学者数のそれぞれ数倍（これにはかなり学校差がある）あり、逆に特殊校が数校ある地方では同一の幼児が二校以上志願する場合もあることから推察するほかはないが、この全幼児に対するパーセントは全体的にみればあまり大きな数になるとは考えられない。幼児の入試を児童問題としてみるとき、一応このような数字を念頭におく必要がある。

しかしこれは、実は地方差がかなりあることで、全国四六都道府県でこの種の特殊校が一枚だけの地方が十四地方ある反面、東京には国立私立あわせて五八校あり、その一年生の総数は三、九九四名で、全児童数一四一、三八二名の二・八パーセントとなっている。特殊

校を志願するものの中には、幼稚園教育を受けていないものもないではないが、大多数は幼稚園に在園して、小学校一年入学児童のうち、幼稚園教育を経験したものが、東京の場合はおよそ三割（全国平均は二割強）という数を考慮に入れれば、幼稚園の領域の内でのこの問題の比重は地方によっては相当な重さをもってくる。

このように数字をあげてくることは、幼稚園教育の中で、入試の問題がどのように扱われることが妥当であるかを考えていたかどうかであって、それがあまりに過大視されても過小視されてもならないからである。はじめにあげたようなケースの背景にはこのような数字が存することを、承知していなければならない。

### (三)

入試は幼児にどのような影響を与えるであろうか。幼稚園教育というものを考えてみると、入試を受けない幼児への影響もみのがしてはならない。これには地方差や、さらに幼稚園差が存するわけであるが、大多数の場合はその園児は入試とは無関係なのである。もし園の保育が入試のための保育といわれるものに偏るならば、園の子どもたち全体が均等という名目からそのまぎぞえを食うか、見すてられてしまう。園に行っても先生が楽しく遊んでくれないうように思う。

入試を受ける子自身については、園でいわゆる準備教育をしない場合には、親の中にはそれを不満に思うものも少なくないので、そ

の気持が子どもにも反映して園で熱心に遊ばなくなり、ただぼうっとしていることもある。園でも型通りの準備に没頭するならば、親の夢中な態度とともに、子どもを極端な緊張におとし入れてしまう。

そして幼児はおとなの問いに対しては型にはまった答えや、まったく的はずれた答えしかできず、その情緒において常にいらいらして、怒りやすく、泣きやすく、疲れやすい状態になる。ことに親がこどもの心身の能力を無視して、ひたすらに入試合格を願うときは、その弊ははなはだしいものとなる。睡眠障害を生じるものや、緘黙におちいるものさえある。

何故に親たちのある人々が、このような態度で特殊校への入学を追求するのであるか、社会はこれを考えてみなくてはならない。教育的な意味において特殊な目標をかかげる小学校の存在することは妥当であり、それに相応する考え方もつ親がこれを望むことは当然であるが、現状はこれからはるかに遠く、特殊校でありさえすればと思っているものも少なくない。全然校風がちがう数校を志望するものには、どう話したらよいか、とまどう場合もある。

この親の態度は社会における特殊校のあり方にも通じ、また普通の小学校の現状にもいろいろの関連があつて、幼児教育者の間だけでは、それと親との関係だけでは解決できないものがあるが、幼児を保育するものは、当面の問題として、幼児を過度の緊張におとし入れないだけの措置をとらなければならない。

(愛育研究所)

# 母の会と 時間



武南高志

幼稚園における幼児の保育を良くしてゆこうと思ふとき、家庭との連絡をできるだけつとめて、幼稚園側は家庭における幼児の生活を知り、家庭側では幼稚園における幼児の生活ぶりを知ってもらい、幼稚園と家庭のよい協力が必要とするはいうまでもないことであつて、そのことの成否いかんが幼稚園教育効果の上にも大きな影響を及ぼすといつてもよい。ところが、幼稚園教育が他の学校と異なるところで、フレールベルが母に重きをおいたのもそこにある。幼稚園

とは、単に学校で幼児を教育するだけでなく、家庭、殊に母親とともに教育する。幼稚園と家庭が表裏一体となつて教育にあたらねばならぬ。そういうところから、幼稚園では早くから母の会が設けられている。私どもは以上のような考えをもつて幼稚園を始めたので、園児として幼児を託される以上、母親もまた全面的に協力していただくことを強く求める。特に入園をきめる面接のときには、その点を強調して承知を願う。そのせいでもあるか、母の会の出席

率はよく、全員の八、九割に及んでいる。会の開催については、どこの園とも大差はない。ただ少しく気を使つてゐることは、出来るだけ短い時間に能率をあげる集りにしたい、ということである。全体の母の会は、一学期に二、三回開く。知らせは必ず一週間前に出す。そしてそれには、開会と閉会の時刻を明記しておいて、それを守る。たとえ出席が少なくても、定刻になつたら開会する。そして閉会時になつたら話の中途であつてもやめて散会する。このように長い間おこなつてきたので、出席する人は定刻から十五分位の間に集る習慣がついてゐる。この会には主題をきめて約四十分、園長が話す。そののち園の行事、また諸注意などを話して終ることになつてゐる。たいてい午後一時半からで、三時半には終つて帰つていただく。それは夕方の主婦たちの用事に対する配慮からである。

そういう際にも、あとに残つて特に教師

と懇談をされるかたもあるが、ひとりか二人で終る。待っていることもできないで、帰り急ぎをするということになるので、そのおぎなひをするために、一学期に一回か二回、少数の人で懇談をする会を開いている。これは私どもでは「グループ母の会」といつているが、七、八人の母親に来ていただき、これも二時間、始めから終りまで、母親と教師全体と話し合いをする。講演などはない。ぶつつけに、「——ちゃんはこの頃、おうちではどう？」というぐあいに話をきり出す。そして母親同志、母親と教師の間にいろいろな話、もちろん園児を中心としての話であるが、これによって教師はその子どもの生育史、家庭の様子、その家のやり方、ならわしなど、いろいろなことを知ることができるし、また母親は幼稚園でのわが子の様子をいろいろときいて、思い過ぎしていたことや、思い足らなかったことに気がつく。

このグループをどういうようにして組み合わせるかについては、いろいろとやってみた。すなわち、住居の近所を一群とした。しかしこの場合、近いためによくないこともあって、その次には離れた所のものを一群とした。また園児の出生月によつたこともある。時には個人面接のように二十分ぎざみに出席時刻を指定することもあつた。いろいろ考へてグループをつくつて、できるだけ有効にと心を使うのであるが、園児全体の母親をひと通りすませるには十数回を要するから、毎週一回、時には二回は開かないと、一学期に一巡しない。これも、知らせは数日前に出して、その出欠も、ただし、欠席の場合は他の人を加え、欠席者はあとまわしにし、もれなく出てもらふようにしている。

以上のような会合や、その他、時に応じて家庭と連絡のための「知らせ」は、謄写刷と連絡帳により、口頭で伝達することは

一切しない。そのことは入園前の母の会でよく知らせておく。それらの知らせは、できるだけ簡潔なものとして、読むよりも見てわかるような書き方をする。連絡帳というのはA6判の小型ノートを各自用に備えておいて、必要に応じて書き入れて持ち帰らせる。そしてそれは、翌日必ず幼稚園に返すことにしてある。ちよつと手数であるが、その日その園児について何かあつたとき、一筆して家庭に連絡することにおいて、家の方でまた気をつけてもらつたり、いらぬ詮議だてをしなないことになる。

幼稚園の母の会が、いろいろなことのために利用されて結構なことであるが、私どもでは母親は子どもにとって大切な保育者であるから、幼稚園とともにそのことを第一義として手を尽してもらいたいと思ひ、かたがた中流家庭の主婦たちの忙しい家事の間からつくり出す時間を、むだにさせないようにと心がけている。(小金井幼稚園)

# 子どもの造形的発想について (2)

林 健 造

## ▽発想 という こと

一月号では、「子どもの造形」について主として造形各領域における子どもの造形活動を中心に述べた。この号はとくに子ども造形的な発想について述べていきたいと思う。

発想などということばは、ちょっと耳なれないことばであるが、近頃デザインではよく使用される。これと似たことばでは、構想・アイデア、思いつきなどがあげられよう。要するに、何を、どんなふうを描こうとか、作ろうとかというアイデアを成立させることなのである。

いわば発想は造形の出発点ともいふべきもので、この出発が間違っていると、その上にいくら築きあげてもむだであり、よい結果をうみだすことはできない。したがって、今日デザインの世界

で、手ぎわよく作るという技巧よりは、より発想を重視されるのは、このことに外ならない。

ところで幼児の場合などを考えてみると、このようなデザインでいっているような計画的思考が働いているとは思えない。

といって、子どもの発想が全然無いかというとそうではない。いかにも子どもらしい、あるいは子どもでなければ生まれてこないような発想がある。これをよく見わけて、とりたてて、大いに激賞してやるのが、創造的な造形を育ていくポイントなのである。

## ▽発想の 基盤

発想の基盤となるものうち、最も大きな力は創造力である。人間が生まれながらにして創造力があるということに異論の

ある心理学の立場もあるが、それにしても、創造力の萌芽までを否定してはいない。もしも人間の能力の中にこのようなものがなるとするならば教育するというようなこと自体も否定されなければなるまい。

「誰も、空家だと知ってドアをノックするものはないだろう。」  
ということばは、この間の事情をたくみに比喩している。

次には、創造力の源泉ともいふべき想像力イマジネーションであろうし、そのまた想像力をそだてるものとなる認識とか観察とかというものが根底になっていることもいふまでもないであろう。

このような見ること——想像力——創造力という一貫された基礎体系とともに、子ども独自の心理的な世界としての、機能的快楽——あそび——材料体験という体系もたしかに発想の重要な基盤になっているといえよう。

すなわち、機能的快楽とは、幼児にみられるあそびの姿で、無目的で、ただ積木をつむこととくずすこと、紙をやぶくこと、穴をあけることと自体を喜んでいる姿をいう。したがってこれは一面材料体験でもあるわけで、粘土で製作するのに、ものを作るということよりも、粘土をべたんべたんと板の上にたたきつけてみたり、手でちぎった粘土を床にながして、くっつくことを楽しんでいたりすることがままあるが、これなどは、粘土の展性や粘着性という特質をあそびの中で理解していることに外ならない。このよ

うに肉体を通し、体感として感得した経験は、きつと次の造形経験を上への発想として生かされてくることは当然である。

また、同様に、アニミズムや子どもの用（機能）ということも基盤になるであろう。

たとえば、おまごごとをしていても、木の葉にこちそうをのせるとすぐおちてしまったりすることから、木の葉をまるめたり、ビンの口金を器物にすることを考えつくなどは、器物の機能を考えていることである。

ルネッサンスのレオナルド・ダ・ヴィンチが、壁のしみから、造形的なイメージを発見したことは有名な話であるが、彼はまた、飛行機の最初の発明家でもあった。おそらく、空を飛びたいという人間の憧憬憧憬は誰ももっていたに違いないが、彼はそれを、まず鳥の形からヒントをえて、人間の体に翼をつけたらきつと飛べるに違いないと考えた。この発想などは、まったく子どもの発想とそう変りはない。今日のすばらしい航空機の発達もこんなところに出発点があったと考えるとき、子どもの小さな発想でも実に宝石のような輝きをもっていることを改めてみなおす必要があるのではなからうか。

### ▽子どもの発想の実際

#### (A) イメージ探し

流れる雲、水のしみ、河原の石、それから木目などをじっとみていると、それが狼の顔にみえたり、兎にみえたりすることは誰もが経験していることである。

おとなでも汽車の窓のくもりの形などから、いくつイメージを発見したかを競うイメージ探しをしたりすることは、車中の退屈しのぎになって楽しいものである。

アニメジムの段階の子どもの場合など、それがもつと真実感をもっていて、御手洗いとドアーの木目がどうしてもこわい怪物が大きな口を開けているようにみえてこわい、などという例がよくある。このイメージ探しは、実は子どもの造形の発想になっていることが多い。新聞紙をまるめたら、あひるさんだとか、お魚だとかいう形の連想の早さは、おとなの比でない。雨ふりの日に水溜りにおとした紙をべそをかきながら拾ってみたら、そのよごれがかにさんになんていて、

「おもしろいな、かにさんがいるよ。」といって、わざわざみせにきた子どももいた。

このような「なーんにみえる」といった遊びは、幼児の場合大いに経験させ、育てていきたい感覚である。

### (B) 三本の刀とポスターの話

小学校の先生をしている友人のA君の話である。「子どもにお話をつくらせるとおもしろいよ。」という。一年生の子であるが、

おばあさんたちがモモを二つに切ったら中から桃太郎が生まれまして、桃太郎もきられちゃうから、きろうと思つたら、いいな。それから桃太郎さんは刀を三本もってでかけました。もしかして犬とあつたら一本やります。猿ときじにもやるので三本もっていくのです。」

実に愉快な近頃の一年生らしい発想の桃太郎のお話である。子どもにおとぎ話を翻訳させることなど、成程考えてもみなかったが、大切な意味をもっているようである。開高健の「禪をしめてチョンマゲを結っている裸の王様」も子どもの発想の真実であらう。

次のポスターの話は、夏のラジオ体操で出席表のようなものにハンコをつけてもらうことはどの学校でもしているし、子どもも楽しみにしている。このハンコが象やペンギンや馬や花の形をしているものを使ったのだが、もらいにくる子どもたちの中には、象だけおしてもらう子や、象、ペンギン、馬、花と美しく交互に並べることを楽しんでいる子もある。ところがペンギンが一番人気があつて、それを押す当番の子の前は大繁盛だが馬は人気がなくその当番の子はがっかりしていたという。ところでその翌日は一策を案じて、自分の机の前に「馬の大安売り」とポスターをだしたという話である。

この話などは、まったく子どもの発想と、ポスターの機能性とがごく自然に結びついている好例である。



(C) 象をつなぐ

一年生に入ってもない子どもたちに画用紙でおりをつくって、そこに好きな動物を入れる製作(工作)をしたことがある。みんなは、にわとりを入れてにわとり小屋にしたり、ライオンを入れて動物園のおりにしたりして楽しい一時間を終えた。

ところがお帰りの時、男の子がひとり私のへやに心配そうに入ってきて「先生、何かひもちょうだい。」という。どうしたのかなと思って、「はい、これをあげましょう。」とひもをあたえると、「ほくのさっきの象さんかして。」という。どうするのかとみていると、ざくと象の鼻をそのひもでゆわえている。そうしてさも安心したように、「これでいいや、さよならあ」といいながら、にこにこしてかきだしていった。つないでおかないと象さんがにげていっちゃうかもしれないと思ったのだろう。実にほほえましい姿だったし、これも子どもらしい発想の一つである。

(D) 窓のあく絵

子どもは誰ものっていない自動車や電車を描くことがある。そんなとき教師は「こんなにきれいな、すばらしい自動車なのに、どうして誰もつていないのかな、故障したのかしら。」などと問題を投げかけていく指導のテクニクがある。

私にこういわれた子どもがいうのである。

「ね、ケープルカーははしっていると窓をしめておくのよ。ほ

らね、窓をあけると、お客様みんな乗ってるでしょ。」

なるほど彼女のケープルカーの絵は、窓が半分きりこんであって、それをひらくと中に人がいるようにかいた紙を裏から別はりつけてあるといったもので、さすがにこの子どものすばらしい発想には教師の私の方がかぶとを脱がざるをえなかった。

▽子どもの発想を大切に

以上のべたような、子どもから生まれる発想は、子どもとよく話をしたり、子どもと遊んでいけばいくらでも発見できる。手袋の指先のほころびからのぞいている指に目鼻をかいて、指人形にして遊んでいたたり、自分の手を太陽にすかしてみて血がみえるといったり、たたんだ紙の内と外に絵をかいてひらくとかわる絵だといったところこんでいたりすることはずいぶんある。

このようなことで発見した子どもの発想を教材としてとりあげてみると、子どもと密着した生き生きした教材になることが多い。

しかも、この注意しなければ見失うような子どもの発想を認めてやり大事にそだててやることは、発想がその後の絵や彫刻や、デザインや工作のいずれの分野にも伸展し、よい造形をうみだすための土台である点からも重要なことである。

(お茶の水女子大学)

# 幼児の心理療法 (三)

玉井 収 介



今回は次の問題として、プレイセラピーに必要な設備や玩具類について説明しよう。

まずプレイルームであるが、個人療法の場合は、二間に二間半ないしは三間ぐらいもあれば十分である。

設備としては水道と流し。これは是非必要で、幼児用に少し低目に設置する。

床は水を流す子どもがあるから、リノリュームか何か張る方がよい。しかし、これはすべるから木のままの方がよいという人もある。

備えつける品物としては、子ども用の机一つとイス二、三脚、それから玩具類を入れる戸棚、そうじ用具一式などである。

この程度が最低の設備であるから、たいしてむずかしいものでは

ない。普通の幼稚園でも学校でも比較的せまい一室を改造すれば十分できる程度のものである。ただ、注意しなければならないのは、他の人が出入りしたり、のぞきみられたりするおそれのない静かなへやであることが必要で、この意味では、廊下からみられる学校の教室などはすこぶるまずいものである。

次にのべるようなことは、プレイルームとしての必須の条件ではなく、もしはじめからそれとして設計するならばという程度の希望条件であるが、わたくしたちの経験から感じていることをのべておこう。

**壁の塗料** 壁に絵具をぬりつけたりする子どもが必ずいるから、全部でないまでも、下から二、三尺は拭きとったり洗ったりできるものにしておきたい。

**そうじ口** 壁のいか所のすみにそうじ口をつくっておくと便利で

ある。

電灯 電灯はぶら下げるよりは天井にはめこむようにした方がいいであろう。何か投げつけたりすると危険だからである。

そのほかマイクロフォンをつけて録音できるようにするとか、ワンウェイミラーを通じて観察できるようにするとかいうこともできればそれにこしたことはない。

つぎに玩具類であるが、一応アクリンがあげているものをしるしてみよう。

ドルファミリー、ドルハウスおよび家具、哺乳びん、玩具の兵隊、動物、ままごと、人形の着ものやそれを入れるバスケット、ゆび人形およびその舞台、フィンガーペイント、砂、水、てっぽう、自動車、飛行機、電話、粘土、用紙類、チェッカーなどである。

次にわれわれの経験による意見を加えてみよう。

ドルハウスは、二階建ぐらいの家をたてに切ったものと、平家の家を屋根だけ抜いたものと考えられるが、われわれは後者の方がいいように思う。大きさは、三尺四方までくらい、つまり子どもが容易に手がとどく大きさで、大体いくつかのへやにわかれている程度の細工で十分である。この程度の大きさだと家具はミニチュアセット、ホームセットなどの名で市販されているものをいくつか買えばよく合う。人形は、この大きさにあわせれば身長一五——二〇センチぐらい。市販のものにはおじいさんおばあさんがいないからわ

れわれは針がねをシンにしたぬいぐるみをこしらえている。精巧である必要はないから、祖父母、両親、きょうだい、赤ちゃんの特徴の出したもの七コ——九コぐらいで一組にするとうい。

哺乳びん衣類などはファミリードルの大きさとは無関係に市販のミルクのみ人形のやや大型のものを使えばよい。動物は、ぬいぐるみのくま、さる、犬、ねこなどとともに、鉄砲のマトになる紙に描いて立てられるようなものがあるのがいいであろう。

クレヨン、フィンガーペイントには用紙がある。クレオンは洗えばおちるものが便利だし、よごれないようスモックもほしい。粘土には、板一枚およびへら数本、鉄砲はかわりにピストルや弓矢でもいいが、コルクのタマの出るものなどがいい。自動車、飛行機、汽車などは、あまり精巧な電気機関車は不向きで、木製のがん丈で単純なものか、押して走らせる程度のものが適している。ままごとやお茶セット、炊事用具などもあまりこったものでない方がよい。電話は是非二コ以上必要である。このほかあってもいいのは、太鼓程度の楽器、ゴムまり、なわとび、洗たく用乾ひも、フライングボール、つみ木、ベルノッカー、ゆりかごあるいはベットおよび毛布その他、黒板と色チョークなどである。ゲーム類は複雑なものではなく、チェッカーはわが国の子どもにはなじみが少ないので、われわれは斗球パンや輪投げを用いている。もちろんこれを全部備えよというのではなく、この中からえらびなさいという意味である。

一般に、避けるべきものの規準は、あまりに精巧で複雑なもの、こわれやすいもの、危険のあるもの、特殊な技術のいるものなどである。

わたくしがアメリカでみた多くのクリニックの中には、とくにブレイルームといつて特別のへやはなく、治療者がその都度スツケースカ箱に入れてもちはこんでいるところもあった。つまりその程度の分量でよいのである。

ただ、こわれたものはあまりおかない方がいいし、ある程度の損耗はさげられないから適当に予備をもっていることが必要であらう。

最後に、付属的なものとして、そうじ用具、手ぬぐい、石けん、かみくずかご、黒板ふきなどがあり、部屋のドアにはさまざまなげられないよう使用中とでもいう札をかけておく方がいいであらう。

なお、親のトリートメントも同時におこなう場合はもう一へや必要になるが、これは、静かで、のぞかれたりしないという条件がみたされればどこでもよい。机一つ、イス二つ三つが最低の設備で、おちついて話せるよう、カーテン、花びんなどあれば申しぶんない。

### △例1 六才の児童▽

この例はさきに制限の話のところでのべた万年筆を折るといって石けんにつきたてたあの子である。

はじめにみたのは幼稚園にいるころであったが、いろいろな事情で実際治療に入ったのは小学校入学後であった。

おもな問題は、全く集団に参加できず、極端におちつきがないこと、吃り、幼児語、乱暴、サイレンや飛行機の音などをこわがる、などで精神薄弱をうたがわれていた。

ひとりっ子で両親の期待はつよく、とくに、いなかのことで、近所に縁者が多く、同年のいとこがいて、それがおとなしい子なので祖母がそれと比較してとやかくいう。そのため、勝気な母親がよけいにつよくこの子に干渉する、といった傾向がつかつた。

さて、治療をはじめたものの、母親からはなそうとすると真つ赤な顔になって、ものをなげる、つばをはきかける、かみつくといった大あばれをするので、一応変則ではあったが母親も一しよにブレイルームに入れることにした。

このような場合は、無理しても最初から離さないと、ますます離しにくくなるという考え方もあり、わたくし自身もこのように一しよに入れて徐々にはなそうとしたのは、このほかには一例しか経験がない。しかし、無理をしたために中断してしまうという場合もある。この例は一応は一しよに入れて成功した方といえよう。

さて、治療者と本人と母親と三人でブレイルームに入ると、いろいろなおもちゃにつぎつぎと手を出す、一つもそれであそぶことができない。いわばひき出して投げちらかすだけといったありさま

である。

大体プレイルームには、たいていの子どもの家よりもたくさんおもちゃがあるから、どれからあそぼうかというのでつぎつぎとつっていくことはよくみられる。とくにはじめの一、二回には少ないが、この子の場合にはそれよりちらかして投げとばすことだけと感じられた。

母親は、何とかしてそれをおちつかせようとして、叱ったり、おだてたり、「ホラ、これおもしろいよ」と玩具を示したり、手をとってイスにかけさせようとしたり、手をつくすが、全く無効である。ところが母親が、「そんなにいることかかないならかえってしまおう」とドアから出かかると真っ赤になって泣きながらしがみつくと、

みていると子どももおちつきがないことはたしかであるが、母親も、「おりこうさんだから」とおだてたかと思うと「おバカさん」といったり、「坐って」といってすぐひきついたりといった具合で、ずいぶん矛盾したおちつきのないことをくりかえしていた。

治療者は、母親に、「かまわないから放っておいて下さい」と数回たのんだのみでそのままにしておいた。しかし、母親は放置しておいたらどんなことになるかわからないのに、とばかりおどし、すかし、おだて、とありったけの手をつくしていた。

こうした状態で二回ほどすぎると、親も子ども次第におちついてきた。子どもは一つのおもちゃで治療者とある程度あそべるようになる

り、母親も子どもがおちついてくるとへやの片すみでみていられるようになってきた。

そのころ子どもがしたあそびは、子どもが汽車をもつて走らせながら、ポーツ……行き！」とどなると治療者がふみ切りを下げて通過ぎさせ、終るとあげて治療者が自動車を通す、という単純きわまるものであった。

こうして数回すぎたあと、母親が途中から「別のへやで先生とお話しているから」といって外へ出たが子どもは平気であった。それで大丈夫と思ってその次の回には、はじめからはなそうとしたところ、あばれはじめて前述の万年筆のさわぎなどおこしたのである。この日は、あとできくと、その前回ひとりであそんだので、ひとりになることには不安はなかったのであるが、それを母親にみせたいとくる途中で母親に話していたのだそうである。それがうら切られたのでさわぎ出したのであるが、こういう気持になったときにはちゅうちよなく離さねばならないともいえる。

そう考えたので、その次の日には、多少のことは予想して離す予定をたてていた。

その日のことは、少しくわしくのべた方がよいと思われるので、次回にしろすことにしたい。



# 私の組の研究

加藤 邦子

## 現場の研究

### はじめに

もしもこの研究が「研究をしよう」との意図から出発したとすれば、ここでなされる報告はもっと異なったものとなったであろう。

この研究は、最初から一つの主題のもとに計画的に整えられ、着手されたものではなかった。新しく入園してきた幼児たちを受け持ち、毎日の保育を精一杯に展開させていきながら、「どうも困った」と保育者が首を傾け、「何とかしてもっといきいきした明るい子どもたちの群にしたい」とくふうをつみ重ねていったものである。報告文にもみられるように一定の対策をたてたのは自分の組の問題を「是非とも何とか解決したい」と保育者が決心をした5月上旬に入ってからである。しかし、保育日誌をこまかくつける習慣が、それ以前の経過をも一貫して報告することを可能にしている。そしてそのため、問題のありかたをつきとめることも、対策をたて、それを試みることも容易であった。

結局、この研究は、保育の中で当面した問題を、毎月の保育の中で解決しようとするべくくふうを続けていきそれを更によりよく改善するために残していったいいねいな記録をまとめたものにはすぎない。しかしこのいき方が、保育の現場でなされる現場の研究の典型ではないかと思ひ、誌上に報告する価値を見出したわけである。

(尚綱短期大学・本田和子)

## 一、問 題

私の組は一年保育の五才児で、男児十一名女児八名から成る。園の構成は、二年保育の五才児一組、四才児一組と、この組から成り立っている。この組の幼児たちは、二年保育の四才児と共に、今年四月に入園したばかりであるが、四才児と比してのびのびとした点が欠けており、概念的な思考や行動はするが、自発的、創造的なものに欠けている。また級内での活動はよいが、全体活動で甚しく委縮し、自信がなく子どもらしく天真らん漫に活動することが少ない。

### 具 体 的 な 例

1 自由遊びにおいて、積極性に欠ける。あまり遊びたがらず、ほとんどもが傍観、あるいは着席したまま、あるいは単独で、ぼんやりと、意味のない動きをする。

2 礼拝の時（全体集合の場合）非常に緊張聖句などはおせずと  
言い、歌声も小さい。

リズム遊びやお遊戯をすると失敗を極度に恐れる。いすとり、かけっこなど、勝敗のはっきり見えるゲームを嫌う。

3 自由画を描かせると非常に概念的な絵が多く、描くことをあまり喜ばない。

他の人の出来ばえを気にして、先生にこれでよいかと幾度も聞く。見にくくと、へただからといって手でかくす。

## 二、原因と考えられるもの

### 1 発 達 的 原 因

五才児なので知能はすすんでいるが、今まで集団生活をしていないので非社会的であり、既成概念の理解や思考の面が進んでいる割合に、身体活動とのバランスがとれない。このことから自己の未熟さを自覚し緊張している。

### 2 組 織 的 原 因

二年保育年長児と年が同じであることを知っており、また二年保育年少児よりも年上であることを知っている。前記の原因から来る緊張感が、この全体の場で行動する時に、意識されており、スムーズに出来ない時に劣等感として表れる。

### 3 家 庭 的 原 因

家庭では「来年学校にあがるんだから」といって幼稚園を学校の予備校のように考えていたかたも少なくなかった。幼児たちはお勉強しようということばを始めのうちよく使った。

また、入園に際し、きちんとするように言いきかされてきて、幼稚園にいったらお行儀をよくして、先生の言うことをよく聞かなければならないと思い、自由に遊ぶということあまり念頭においていない。

また、家族の中に、子どもをおとなの標準でよくしようと思  
うあまり、評価がきびしく否定的なしつけを続けてきたかたが  
あり、その子どもは結果や人の思惑を気にして人前では何もし  
ない子になっていた。

また、両親共かせぎの為、老祖父母の手によって養育されあ  
まり外に出て遊ばなかった子もあり、今までひとりっ子だった  
のに、ちょうど入園期に赤ちゃんが生まれて、そのためか何と  
なく物足りなそうな子どももある。また、転勤で土地やことは  
になれず、近所に友だちがない場合もあった。この組には双生  
児が一組おり、二人共内攻的な性格であるが、ひとりはより強  
く内攻的であるので、もひとりに対して依存しておりながら、  
また、劣等感を持っている。しかし兩人とも互いに同一視する  
ことが多いのであまりはつきりとは意識していないようである  
が、比較されるような場面で、級友に名前をまちがえられた時  
など異常な緊張を示す。

以上、ひとりずつとりあげれば、各々種々の原因がからみあ  
っているが、このように委縮的内攻的な性格傾向をもつ幼児が  
約二十名中十二名程であり、その上、1、2、などの理由によ  
り、クラス全体が一般的に、委縮した雰囲気になっていたと思  
われる。

### 三、目的

組全体として、委縮した雰囲気と劣等感から解き放ち、のびの  
びと園生活を楽しめるようにし、同時に五才児としての自信と  
自覚とをもたせたい。

#### 四、対策

##### 1 全体に対して

④ 創造性を伸ばし自立心を養う為に

また、人との比較を少なくして劣等感が起らないようにす  
る為には、形による比較の困難な、そして思う通り自由に表現  
することの容易な活動を多くする。(カラージュ、つみ木、モ  
ビール、粘土、もぎいく模様(画用紙で) カラーサンド(色  
付け砂) フィンガーペンティング)

⑤ 音楽リズムの面において

擬声音のとり入れてあるもの、また調子のおもしろいリズ  
ム、あるいは歌詞がおもしろく朗らかなものをえらんだ。い  
ろいろな模倣表現のあそびや、自由表現を多くさせる。

##### 2 特定の個人に対して

⑥ A男、B男、

内攻的性格をもつ双生児であるが、B男は少々明るい感じ  
で比較的開放的であるので、私のそばからはなし、明るい感  
じのグループに入れる。A男はほとんど何も話さない暗い感



じの子なので、私の最も近くに席をとり、最も仲のよい女兒C子と並ばせる。C子は他の原因から気弱な性格になっているが、なれた人に対しては明るい女兒である。A男と性格的に共通点もみられ、仲もよいので、特に内攻的なA男が劣等感をもったり、今以上に内攻的にならないよう配慮したつもりであった。

Ⓑ D男

非常に気が小さく恥ずかしがりやであるが大勢の中に入つて、気がむけば大声を出して騒ぐ。双生児のB男と並ばせる。

Ⓒ E子

内攻的で非社会的である。入園時に母よりはなれずてこずったが、その後先生に依存し、はなれなくなった。しっかりしてやさしく世話好きな女兒F子のそばに坐席をきめる。

この他にもっと挙げる事が出来るが大なり小なり問題のある子どもを特に意識して、自由遊びの時にも身近に接近して遊ぶようにする。

五、経 過 (四月より九月まで)

1 四月中旬頃の状態

D男、E子、C子、A男、G男など四、五人の幼児は中旬になつても、まだ母のそばをはなれず、園まで送りむかえはもちろんのこと、中には一日中、玄関で待っていなければ泣く子も

あった。お母さんたちに了解を得て、毎日今日は保育室の外、次はお庭、次は玄関、そして帰り途の途中までというように距離を遠くし、一方そのような子と私が手をつないだり、泣く時は抱いたりして近くにおいた。

他の子たちは自由遊びの時も一こう室外に出ず、ただ不安そうに席からはなれないでいる。

2 四月下旬

前記の子どもたちは母のそばからはなれるようになったが、先生や、一定の友人のそばから離れず、ちよつと顔がみえないと泣き出す。その他の子はほとんど自分から遊ぼうとせず、自由遊びの時も室内に坐っており、あるいは少数の者が立つてぼんやりと他のクラスの子が遊ぶのをみているだけであった。

3 五月上旬

遠足について予告したので期待をもち、級内で話し合いが活気ついた。しかし、自由遊びの時は女兒男児ともに二、三人だけがジャンクル・ジムや砂場で各々二人単位ぐらいの小グループで遊ぶ程度で、他の $\frac{2}{3}$ ほどの幼児たちはテラスや廊下に腰かけたり、立ったりしながら傍観している。

私が汽車ごっこ、かごめなどの遊びにさそうとそのうちの約半数は出てきて遊ぶがあの半数は、笑いながらしりごみをし

て入らない。

この頃全体のリズム遊びの時わくぐりのリレーをした。他のクラスの子たちは年少組には一、二人拒否する子もいたが一般には騒ぎ興じながら熱心にその活動に参加していた。しかし私のクラスの子どもはほとんどが非常に緊張し、女兒二人（C子E子）男児三人（A男、D男、G男）がこのゲームに出ることを拒否した。また別の日に、ひとりずつスキップをする場面でも前記の男女児五名が、先生と一しよにしましようといつても立たなかった。またその誘いでやっと立ち上ったのが他に五、六名程であった。

この頃自由画をかかされると、描くことを嫌うものが多く、ほとんどがかいても線がきであった。

#### 4 五 月 中 旬

待望の遠足の日、到着の後集団遊びなどをしたが、約九人はかりの幼児はほとんど父兄の側からはなれず参加しなかった。しかし、これは疲れの故もあるかもしれない。この週遠足の思いの話し合いが楽しくおこなわれた。私は非常に活発になったクラスの雰囲気期待をもちながら、思い出の絵をかくよう暗示を与えると、「僕はかけない」とひとりが言い、二、三人がそれをまねした。どうしてとわけをたずねると、「下手だもの」といった。この日はやめて、一、二日してから遠足のリス

ムあそびなどした後何も言わず描きたい人は何でも好きなものかいてごらんといい、紙を机の上に重ねておいた。ほとんどの子は周囲の様子をうかがったりして席をたたなかつたが、B男がすつと立って恥ずかしそうにしながら紙をとりに来るとB男が「かみ」と言いながら手を出して取りに来た。すると皆が次々に紙をもってゆきほとんど<sup>2/3</sup>くらいの子が遠足に関する絵をかいた。しかし概念的なものが多く、チューリップとお人形みたいな女の子とおひさまが圧倒的であった。また画用紙の隅の方とか一部分に小さくまとめてかいてあり色数も少なかった。何か自信のない感じを全体から受けるものが多かった。

#### 5 五 月 下 旬

この頃から課題画をやめて、自由に思う通りの活動を多くしようと思ひ前記の対策をたてる。返事の低い子（A男、C子）があつたので、皆で動物の鳴声をまねて思い切り大声を出してみた。鳴声で返事をさせると喜んで大きな声を出したがかえって出来なくなった子もあり、二人でさせると大きな声を出した。三、四日後ゼスチュアを加えてみると各々喜んで部屋の中をはったり、はねたりして騒然となる程であった。翌日、四、五人のグループごとに好きなゼスチュアをさせる。各々のグループに積極的な幼児がひとりか二人ずつ入っているので彼らがいっしょすると喜んでまねをした。この頃から型にはまったお遊戯

## 6 六月上旬

をやめて、専ら自由表現によるリズム遊びを多くした。また、則武昭彦氏によるおそうじの歌は幼児たちに非常に喜ばれた。

「ほうきがしゅっ、しゅっ、しゅっ、  
はたきがぱっ、ぱっ、ぱっ、  
ぞーきんすーする……  
ちりとりえっさっさ、  
如露がかんからかん  
お水がチャッ、チャッ、チャ……」

内容的に体験を通して知っているものであり、擬声音がおもしろく入っているので興味を感じたものと思われる。

この時期に、お玉じゃくしの製作をちぎり紙でしてみた。紙を破っているので思うように形にならなかったがちぎってはるという指先の快感に興味をもったのか、珍しがりおもしろがっては紙を破いた。前記の目的でカラージュをしたかと思っただがどのように動機づけたらよいものか思索していたところだったのだ、この傾向を展開するように考えてみた。翌日、シールはりの時に皆でテラスに出て、お天気のことなどの話の中に雲の形や大きさや、何にみえるか、どんなのが好きとかを話し合い、そのあとで好きな色紙を与えて好きなようにちぎらせた。好まれた色は圧倒的に紫と茶であり、水色、ピンク、赤、みどり

## 7 六月中旬

などの順であった。これはあとでカラー・サンドを使用した時もほとんどこの順序であった。色紙をただちぎらせるのが非常にもったいないと思ったが、思いなおして、お道具箱(当園では普通の菓子函のようなボール箱を使用)をもってこさせ、思う存分ちぎったあと、こまこまとなったものを私の所の大ボール箱に集めた。各自の箱から大きな箱にあげる時、いろいろの紙がチラチラ散るのでひとりが箱から掴み出して、キャッ、キャッと騒ぎながら、走ったりとんだりした。私はとめようと思っただが、こんなに楽しげに騒然としたのはほとんど珍らしいので、私も一しょになって、紙屑をかぶり「きれいねえ、すてきねえ」などと言いながら子どもにかけたりかけられたりして室中をとびまわって遊んだ。このあと、おそうじの歌をうたいながら、全く大ざっぱではあるが室の中をかたづける。この日は子どもたちは生きいきし、満ち足りたように元気であった。

天候はからつゆで曇りの日が多く、湿度が高く気温が低かった。ほとんど室内遊びが主であった。前週に続いてちぎり紙をしたが、これを八つ切画用紙の1/4大のものにはらせてみる。A男、B男共に非常に集中してこれをおこない、色彩的にも構成的にも美しいものが出来た。A男は色彩的には強烈でありちぎりかたが柔かく、時間的にも、始めから終りまで口もきかず

頬を紅潮させてほとんど画面より目をはなさなかった。全体的に印象的に強烈であった。B男は色が柔かなものであり形が大きく、隣の子(D男)と笑ったりみくらべたりしながら早く終ってしまった。あとで各自のものを展覧会ごっこをして陳列し、電車ごっこをしながらみに行くあそびをする。私は絵描きの大先生になり、一つずつ全部のものをほめて歩くと、一人ひとり非常に喜び、このあとコラーージュが自由遊びの時要求されるようになった。この活動では一人ひとりが皆異った特徴が出て、人の模倣は不可能であり、一見して優劣がつかない為か、今まで絵をかくの嫌がっていた男児二名は喜んでコラーージュをするようになった。この週は室内遊びの際積木が盛んであった。そこで色紙をはさみで三角や四角にきり積木を作ってみたりしたあと、クレヨンで画用紙にいろいろな形、色の積木を描いた。現実にはあまり重ねると落ちてくるが紙の上では自由なのでいろいろとおもしろい幼稚園や魔法のはしごや魔法の城など、幼児たちは想像のままに三角や四角で重ねたり区切ったりして遊んだ。しかし線になれないので、模倣的になりがちで、四角よりも、三角が圧倒的に多かった。その三角も直線というよりも曲線的であり角がかけたりしていたが、これもだんだん線がしっかりかけるようになった。また三角や四角の組合った部分に他の色をぬることを始め、それが極めて調和的な色彩を用いるようになった。ある子は色を次々ぬることを楽しんで、多くの色

を次々ときれいに並べた。

またある者は、三角や四角の中に更に線で区切ったり二つの形を重ねたりすることに興味をもち、画面をあちこちみわたしながら線で構成を楽しんだ。歌を口ずさむ者、飛行機の音、自動車の音などをまねする子、いずれも30分の所定時間を十分に使い、紙面がまだ半分かりのこっていたので、翌日またするように話して、自由遊びをさせると、一度しまいこんだものをまた持ち出して来て始めた。

これ以後、自由遊びの時間に多くの幼児が、自由画帳にこの種のものを描くようになった。写真は前述のA男(写真(2)下)



(1)



(2)

B男(写真①上)の作品である。

この週、体力しらべをした。しかしC子だけが顔色をかえて拒否した。競争で人に勝てないということを非常に気にしてほとんど恐怖的になっているように思われた。この女兒は、家庭の中で、しつけについての対立があり、一方がおとなの標準で子どもの行動を評価し、否定的なしつけをするので、結果を気にして、物事をするのを嫌がる傾向がいついてしまっていた。しばしば家庭と連絡をとり、いろいろ話し合ったりしたが表面上は納得したかのようにみえて未だ家族間の折合いがつかず、根本的な原因は、家族間の不和が教育法の問題に発展しているで、なかなか解決がつかない。

## 8 六月下旬

七月の七夕まつりゆうぎ会の為に劇遊びを計画する。紙芝居のどんどこ太鼓が大好きだったので相談の結果その劇をすることなり、希望者を募った。なるべく、自信のなさそうな子を選び出して、各々反覆して同じせりふと動作をするような役をさせる。主役はリズム感のしっかりした積極的な女兒を配して、この子の動きによってリードされるようにした。

また、別に、歌と動きだけで表現するリズム劇天の河を計画した。この主役には、内攻的なA男、B男、E子をして一か月おくらせて入園し、病気のため六月まで休んでいた子で孤獨的な

## 9 七月月上旬

性格のH子を組ませ、二人ずつ、織姫と彦星にした。また動作の鈍い比較的ぼんやりした感じの男児を二人ずつ組にして各々彦星につくスワンにした。このリズム劇は簡単なので皆らくにやっつてのけ、満足していたようであった。この他に残った人たちがどうしても劇をしたいというので相談すると一寸法師がしたいということになった。これも脇役には割合しつかりした子を配し、主役には気が小さい、しかしちよつとがんばれば出来そうな仲よし二人をえらんでみた。これから毎日時間さえあれば、劇をしよう劇をしようと言って迫るようになった。

この頃折り紙をこちらから教えて折らせると「つまらない」と言い出したので、あらかじめ作るものをいっておいて最後の一つ前まで折ってからかくふううさせるようにすると、いろいろ考えながら勝手におもしろがっては自分だけ納得のいく目的物を作った。しかし説明をきくとなるほどと思うようなものもあった。がやはり折り紙はなかなかかむずかしく相当の指導を要するようであった。

この頃指絵をさせてみたいと思ったが、材料が揃わなかったので、指先の抵抗の違ったもので自由にかきまわしたりできるようなもの、と考えて、砂を色付けしたものを七色作ってみた。園庭の砂を土ふるいでふるって同じつぶの大きさのこまか

い小石を集め、ボスターカラー粉絵具とメリケン粉各々同量を熱湯でこねたものをかけてませ合せ着色し、板の上に新聞紙をしてその上で乾かした。はじめの日、室を机で六つに区切り床に新聞紙を大きくはり合せたものを用意し、各色ごとに配置し、好きな色の所に、二、三人ぐらいつつにわけて遊ばせた。遊び方は別に何もいわなかった。はじめは珍しそうに指でさわったり、お山を作ったりしていたが、そのうちに池を作って、お玉じゃくしだといって砂を一粒落したり、指で線をかいて、「ポーッ」と声を出しながら手のひらを横にして汽車のまねなどをして遊んだ。この時各々の色を選んだ順はやはり、この間の色の紙の場合とほとんど一致していた。

紫—A男、C子、K子（内攻的）

茶—B男、D男（やや明るい）

緑—S男、M男、Q男（非常に明るい子たちで活動的である）

赤—H子、R子、A子（明るいが各々個性的で性格が強い）

橙—Z子、R男（非常に落ちつきがなく騒がしい子）

黄—石の色が出て濁った色になったので与えなかった。

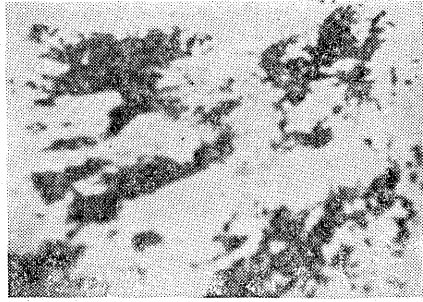
青—J男、L子、E子（三人とも、口数の少ない内攻的な性格、しかし、しっかりしたところがある）

このような子どもたちの性格と色についての好みがどのような関係にあるのか、まだよくわからないが、ほとんど同じような傾向の性格の子がいつも似たような色を選ぶことは非常に興味ぶ

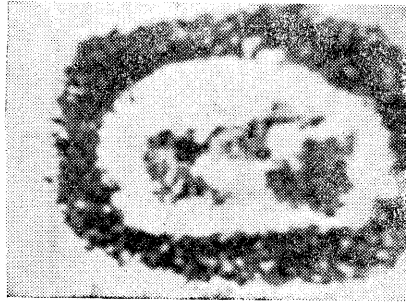
かく感じさせられた。この外に、その日休んでいたO男はいつも水色が好きであったが、彼は品の良い貴公子のような感じの神経質で、知能の高い子どもである。去年のクラスにも同じような子がいて、彼もまた水色が好きであった。さて、このあと、一度同様にして遊んでから、次には各色ごとに口の広いびんにつめて、グループごとにわけて与えた。画用紙を渡し、のりを使用させ、好きな色を好きなようにつけてごらんというところ、手のひら一杯にのりをつけて紙面をなでまわし室中騒然とした。そのあと、手を洗ってから砂をざらざらと紙の上に落し始めた。山になるほど各色の砂を落し、こすったり指で線をかけたり、また、かきまわしたりしながら声を立て机のまわりをかけるまわるありさまであった。驚喜ともいえるほどの熱中ぶりである。このあと、お片付けをさせないわけにもいかないもので、ものすごくちらばった室をほうきではくのはとてもいやなものであった。このあと、かわいてから表面の砂が自然に落ちるにまかせて最後に残ったのを見ると、一番始めに使った色の順序や、手のうごぎのあとなどが出てきて興味深かった。ほとんどが真ん中はこまかく、周囲になるにしたがって手のうごぎが大きく大胆であるように見られた。元気のいい子のはやはり散々こねまわしたあとがあり、性格の弱い子はバラバラと砂が四散してあまりいじったあとがなく、内攻的な子は、画用紙のあちこちをちょこちょこいじってみたらしく所々に砂がかたまっけて置いてあると

いった具合である。色も各々に特徴があり最初のもが多く残っていた。

写真3は元気のいい子でダイナミックにいじりまわしたあとであり、写真4はおとなしくお池にお玉じゃくしと蛙を作ったものである。



(3)



(4)

## 10 七月 中旬

七夕遊戯会が催され、予定した三つの劇が各々精一杯の緊張の中におこなわれた。年少組の先生が病気で休まれたので前の週から年少組と一しよに天の川のリズム劇をやり、人数がふえまた、年少組と一しよの故もあって安心感があつたらしく、年

少児をリードしながらおこなっていた。

どこど太鼓では三人の反覆する動物の役が効を奏したのか、全く同じ動作とことばがくり返されるので、自信のない依存性の強いこの子たちは赤くなりながらも大きな声でやり通すことが出来、この後、非常に自信がついたように思われる。

一寸法師の主役になった子は、あまりめだたない落着きのないあわてもので、その割に神経質な子であったが、主役という責任の故か非常にしっかりして予期以上の効果を上げることが出来た。そして劇の効果以上に、この子は自信が出来、注意してものを聞き、大きな声で立派に話したり、ひとりで歌うことが出来るようになった。お姫様になったC子は例の家庭的な問題をもっている子であったが、ことばも動作も興味をもって自分から熱心におこなった。ただ、声がいとも低かったため、当日もそうであり、帰宅後そのことで失敗をきめつけられたという報告が家庭よりあった。しかし翌日彼女にあってみると、自分では自分の声がきこえたから立派にやったと自信をもっており、また当日私が、声は低いにしてもあれだけ積極的且つ熱心にやれたことに對して絶讃を表したため、喜びと自信にあふれており、祖父の叱責に対しては意に介さずむしろ反抗的な態度を示した。私は早速家庭訪問をし、彼女がいかに進歩したかを話し、相対的評価よりも個人的な進歩成長の過程をみつめて、評価を下さるように話し了解していただいた。一方、園では

彼女に対して、おとなはあなたがいい子になるように心配してくれるのだからとしよりを悲しめないようにいきかせた。五才児なので、手を握りながらしんみりと話す私の目から目をそらしながらも、考え考え、うなずいていた。しかし、この子の意識の底には小さい時からの親と老人の対立感情がしみこんでいるのか、こんなことをいった。「わかったわ、でも本当はおばあちゃん大嫌い」「なぜ?」「お母ちゃんいじめるからよ」そして更に「先生はおばあちゃん好き?」ときくので少々当惑したが、大きくうなずきながら「ええ好きよ、だってね、本当はいいかただもの、先生はよくわかるの、Cちゃんはまだ子どもだから、よくわからないかもしれないけど……」と答えた。彼女は、まじまじと私をみつめながら「そーお」とじつと考えこんでいた。私はこの時、ふと、自分はこのおばあちゃんを果して善意と十分な愛情を持って考えて来たのだろうか、と反省させられた。例え解決へのほど遠い一步にしかすぎなくとも、満身の愛情と善意が、一人ひとりの幼児と、その家族に注がれるべきだと、ひしひしと感じさせられた。

七夕遊戯会が終ってから、それまで緊張していたので少し自由遊びの時間を多くし、暑い日が続いた為、下着一枚になつて、足洗い場で水あそびさせる。

服をぬいだ解放感と水の涼気とをよろこび、この頃、水鉄砲、おせんたく、おふろなどの歌やおそびがおこなわれた。ク

ラス全体としてのびのびと解放的な雰囲気となり緊張感がなくなり、創造的な活動が多くなってきた。しかしまだ、二年保育年長児のように、五、六人のグループ遊びはなく、グループはあつても、二、三人ぐらいで持続時間も、五分とは続かなかつた。この頃の自由遊びの状態と、五月下旬の概況と比較してみると次のようである。(行動が変わるので合計は延数人)

	五月下旬	七月下旬
傍観	五人	二人
本よみ	五人	四人
おしあい	なし	二人(隣の組の子と)
走る(目的無)	五人	三人
砂場(単独)	三人	三人
ブランコ	一人	一人
たいこばし(単独)	一人	三人
鉄棒(なし)		四人他に単独行動一人
ジャングル	二人	二人(集団)
ボール投げ(集団)		二人
(五月下旬なし)		

このあと夏期休暇に入り、九月に入ってからしばらく元気がなかつたが敬老会のため簡単な全員出演の劇を計画。皆、一言ずつせりふを言う役があり、この頃劇という目色を変えてとび上つてよろこぶようになった。

夏休み後、水彩を与えたが、あまり興味を示さず、また、太陽



と家と女の子とチューリップをほとんどがかいた。多くのものは傍観。(自由遊びの時、場を設定して自由においたので)しかし、老人への贈物の菓子入れの袋を製作し、絵をかくて、という、多くのものはクレヨンで三角四角のシュールレアリズム張りの模様をかいた。やはりクレヨンの積木らしく、このことを「クレヨン」の「積木」としてイメージに残っているらしく絵筆や水彩絵具を与えると依然としてチューリップである。

### 九月中旬まで

敬老会の行事が中心となって保育の中にとり入れられたが、この頃、情緒的なものを好むようになり、則武氏の赤いお馬車という歌を好む。歌詞は牧歌のように夢がありメロディも楽しい感じのものであった。また同氏の十五夜おもちつきの兔の歌を劇の中にとり入れたので、自由表現を試みたところ、次々と考え出し、ついに、劇中の四つの歌に各々自分たちで振付けた動きのリズムが出来るようになった。この頃、歌を教えると大きな声で元気に歌い、特にスタッカートのあるものをよろこぶ。また、シンコペーションになつていような珍しい感じのする曲を手で休止符を教えたりして歌うのを好むようになった。また情緒的な短調の歌なども気分を出して歌うようになった。

お月見の劇(敬老会でする劇)の中で兎がおもちをつくところがあり、これをする女兒が、庭からクローバーをとって来て、

うざちゃんにクローバーのおもち作ってあげましようと言いな  
がら、自由遊びの時、小皿の上でつぶし始め、兎になった五、六  
人の女兒を中心としてまご遊びが始まった。入園当時、ま  
まごのためにござと道具を用意して頂いたのだが、余り使わ  
れず、そのままになっていたので探したが見当らず、仕方がな  
く、教壇を平らに二つしいて二帖ほどの板の間を作り、空きび  
ん、のりの大きな空かん、汽車に乗った時持ち帰ったお茶のび  
んとふた、麦茶のコップ、牛乳のふた、生けてあった小菊など  
を少々かごにいられて、「プレゼントいたしますわ」などとおど  
けてもってゆくと、きゅーととび上つてよろこぶ。机といす  
を自由にしてよいと許可を与えると、お風呂、玄関、台所など  
が出来、ほうきとごみ箱がおかれ、お風呂屋さんが開業され、  
ぶたやさんがまわつて来る。男児で靴泥棒になる者もあつて苦  
笑させられる。また、ごむまりをスカートの中に入れたお母さ  
ん気取りの女兒が「もうすぐ生まれるんですよ」などと言  
うと、もうひとり男児がまりを二つ上着の下に入れて、「ふた子  
なんですよ」などといって、私をあ然とさせる。そばで双生児  
の子が恥ずかしそうに笑いながら二人でおしあいをしている。

先の女兒は八百屋さんの子でいつも庭先で遊んでいて、近所  
のお母さんのまねをしたらしい。もうひとりの男児は、双生児の  
家の近くにすんでいる無邪気で活動的な子で、八百屋さんの子  
と気が合うのでこんな会話になつたと思われる。私はお客様に

されたり、お風呂に入れられたりする。この日より三日、毎日ままと遊びがつづく。(写真う)くたびれた人が二、三名、笑いながら時々みているが、ほとんど例外なく、子どもになったり、各々の役で遊んでいる。リーグーになっているのは鬼の主役をしたI子という女兒とC子である。I子は、クラス中で最も体格もよく、知能も優れており発表力もあり素直でしっかりしており皆から好かれている。C子は、お母さんになって命令したり、お姉さんになってお母さんに協力したり、口数は少ないが、まないたの所からはなれずに仕事をしながら、一家(?)をきりまわしている。彼女のどこにこんな点がひそんでいたのだろうか。

九月もなかばの声をきく今日この頃、入園時とは違ってかわつて、静かにといくら言いきかせても、旺盛な活動力とはとどまるところをしらず次

(5)



↑ C子

↑ I子

↑ E子

々と遊びを生み出し、会話を生み出し、自由遊びの時間はいくらあっても足りないようである。まるでぶどうの房が色づいて甘い匂いをはなつように、今、このクラスには、楽しい豊かな味わいのする雰囲気のみなぎって、子どもと私、子どもと子どもとの間に有機的なつながりが生まれてきたように思われる。

## 六、まとめ (第一保育期をかえりみて)

現在、当初の目的を顧みて、ほとんどその目的が達せられてきたように思われる。しかし、今までの歩みを、特に、対策とその経過を顧みる時、全く暗中摸索であり、一つひとつの試みたことが、どんな効果を生み出したか、甚だ曖昧なものである。それ以上に、この幼児たちの内に秘められた成長力が、極めて不確かな刺激の仕方にかかわらず、溢れ出たという感を強くする。しかし、まだ今後に残された問題が次の段階として山積しており、一人ひとりをつめて、新しい目標と対策を樹てなければならぬ。その意味で甚だ潜越ではあるけれど、あえて今までの試案の効果と思われるものをまとめてみる。

### 1 (4) 形による比較の困難な活動

コラージュ、カラーサンド、クレヨン、積木、など比較がしにくいので劣等感が起らず、模倣が出来ないので創造性が養われ、珍しいので興味をもち、色彩感、構成能力、活動力がついたと思われる。しかし、今のところマンネリズムにおちいりそ

うな感があり、この後の対策を考えねばならない。

(四) 音楽リズム面において

擬声音、模倣表現は(特に動物の動きの表現)生活に親しみがあがり、緊張感を柔げる役目を果し、更に模倣より簡単な兎や狐、狸のお遊戯と、創作出来るような動機づけとなったように思われる。

(五) 劇あそび

力量相当の役に責任を果すことによつて、劣等感がなくなり自信をもつようになった。特に、総出演でひとり一言の劇は、満足感と共に成功感と自信を与えたように思われる。

2

(四) A男、C子、隣り合った席で毎日決してはなれず、また、

A男は私と常に一定の間隔を保つて遊んでいる。安定感をもつたようであり、これにはB男が同じ組にすることが大いに関係していると思われる。なおこの二人の父母は仕事の為、五月中旬より、この子たちと別居しているが、二人はおばあさんと共に暮し、元気に異常なく登園して園生活を楽しんでいる。

(四) D男、B男、共に活発になりお調子にのつて騒ぐようになった。

共通点があるので気が合い、元気になったのはよいが、少々反社会的行動(D男)がみえてきたので今度はまた別に席の配置を考えている。

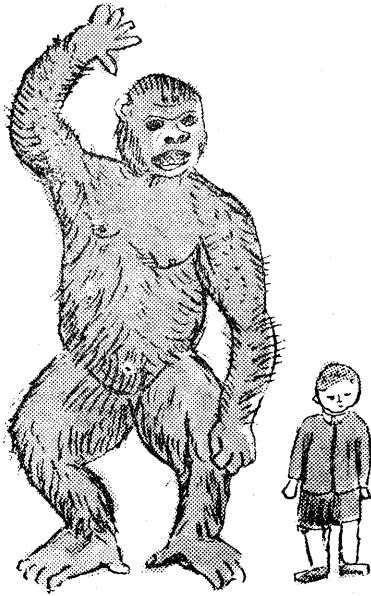
(五) E子、まだ非社会的ではあるが、とても朗らかにひとり

で自立することが出来るようになった。しかし、気のむかない時や、あまり目立つ時はひとりで要求された行動をすることが出来ず頑固に拒否する。隣席のしつかりして世話好きなやさしいF子が大好きでありこの人を通して多くの友人と近づき安定した友好関係をもっている。しかし、ある特定の活発すぎる男児を極端に嫌っている。

こうして一人ひとり考えてみると、その性格にはそれだけの原因が組合されて備えられていることに気付く。一年保育児が一クラス編成されたのは今年がはじめてであるが、その特徴ある欠点と長所が、ここ半年の間にいくらか、かいまみることが出来たように思われる。地域社会の経済事情、幼児教育への理解などの諸問題から、まだまだ一年保育の占める役割は大きい、この限られた短い時に最大の関心を払つて、良き生涯の礎をすえる一端の任を果すことが出来たらと願いつつ、拙稿を閉じることとする。

なお、この研究をすすめるにあたっては、尚綱短大保育科の先生が、および尚綱幼稚園の諸先生に、御指導、御協力を頂いたことを付記して感謝の意を表します。

(尚綱女学院幼稚園)



い さ む  
ち ゃ ん

桜 田 佐

(三)

たまちゃんのおとうさんが大きな声で、

「ことしのおきやくさんは、いさむちゃんでーす。」

というと、みんな「ウワー」といって、バチバチバチバチと手をたたきました。

いさむちゃんはおじぎをしました。

たまちゃんのおとうさんが、

「いちばんはじめに、会長のゴリラのゴリくんのごあいさつ。」  
すると横のほうから毛むくじやらのゴリラのゴリゴリくんが出てきました。

「エッヘン、オホン。大みそかの晩は人間どもにはいそがしいときであるが、われわれ動物にとっては一年に一度のたのしいときであります。人間のうちにいるものは、そつとぬけだし、森に住んでいるものは森から、穴の中のもののは穴の中から、山のものは山からとびだしてきてここに集まります。そして、話をしたり、歌をうたったり、ごちそうをたべたりして、あそぶのであります。

わたしたちは、この日、わたしたちにしんせつにしてくれる子ど

もをひとり、おきやくさんによぶのであゝる。ことしのおきやくさんはここにいろいさむちゃーん。」

みんながまた「ウワー」といって、パチパチパチパチと手をたたきました。

「いさむちゃんのごあいさーつ。」

いさむちゃんが立ちあがりました。

「ぼくをおきやくさんによんでくださってありがとうございます。みんなでゆかいに大みそかの晩をおくりましょう。そして元氣にお正月をむかえましょう。」

こういっていさむちゃんがおじぎをすると、またみんながパチパチと手をたたきました。

「ようちえんの子どもたちのゆうぎ。」

ピアノが、タンタンタカタカターントン、となりだしました。すると、それにつれて、小さな子どもたちがはいつてきました。

うしの子ども、うまの子ども、いぬの子ども、ねこの子ども、さるの子ども、うさぎの子ども、りすの子ども、ぶたの子ども、やぎの子ども、ひつじの子ども、あひるの子ども、にわたりの子ども、そのほか、たくさんの子どもたちが、いさむちゃんの前で

わをつくりました。

ようちえんの先生はうさぎさんです。

「はじめー。」

「もういくつねるとお正月……」

子どもたちは大きな声でお正月の歌をうたって、ゆうぎをしました。

「うまい、うまい。」

「きれいにそろふなあ。」

パチパチパチパチ、とはくしゅがおこりました。

「つぎはおさるのブランコ。」

たくさんのさるがでてきました。二ひきのさるがするとやねうらにのぼって、はしらにぶらさがると、つぎつぎにほかのさるが手をとってぶらさがり、ぶらんぶらんゆすぶって、両方の下のさるが手をつなぎ、はしをつくりました。それにまた大ぜいのさるがとびつき、ぶらーりぶらーりぶらーりぶらーりととてもおもしろいぶらんこをしました。

そのとき、むこうのほうから、ずしんずしんと地ひびきがかいてきました。

なんでしょう？

あつ、ぞうです。大きなぞうです。動物園からかけつけたのです。

「ああ、つかれた、つかれた。いっしょうけんめいかけてきたのでね。」

ぞうさんはハーハー息をはずませています。さむいのに汗をかかしているの、うさぎさんがせなかをふいてやりました。

「ぞうさん、何かやってく下さい。」

「よし、きた。」

ぞうさんは大きなフラ・フープをからだにはめ、はなに小さなフラ・フープをかけました。

ぞうさんははなを上にもむけて動かしながら、じょうずに小さなフラ・フープをまわしました。そして、それといっしょに、大きなおなかを前に出したり、うしろに引いたりして、人間がつかうのよりずっとずっと大きなフラ・フープをぐるぐるぐるまわしました。

「一、二、三、四……」

と、子どもたちがかんじょうしています。みんなが、

「うまいぞ、うまいぞ。」

「しっかり、しっかり。」

「おとすな、おとすな。」

と、さげびました。

ところが、ぞうさんは

とてもじょうずで、いつ

までもいつまでもつづけます。

そのうち、だれかが、

「おなががすいた。おなががすいた。」

と、いいました。そうすると、みんながいっしょに、

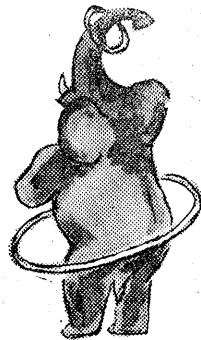
「おなががすいた！」

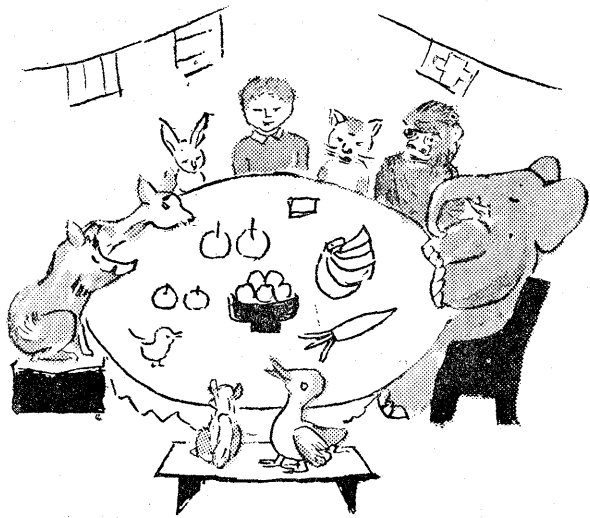
「おなががすいた！」

と、さげびました。ぞうさんもおなががすいてしまつて、とちゆうでやめてしまいました。

「ごちそうだ——。ごちそうだ——。」

と、みんなが口をそろえてさげびました。





(四)

「ごちそうだ——、ごちそうだ——。」  
と、みんながさげびますと、ゴリラのゴリゴリくんが、  
「エッヘン、オッホン。では、みなさん、食堂へ。」

と、いいました。すると、おくの戸がさつと両がわにひらきま  
した。みんな、「ウワー」といって、食堂へはいりました。おし  
あつたり、ついたり、たいへんなざわざです。

「ワンワンワンワン」

「プープープープー」

「ニャーニャーニャーニャー」

「モーモーモーモー」

「メーメーメーメー」

「べーべーべーべー」

「ガーガーガーガー」

「コケーコッコッコッコ」

中へはいって、びっくりしました。大きなへやです。床には赤  
いきれいなじゅうたんがすみからすみまで敷かれています。てん  
じょうには旗がいっぱいかざられ、まわりには色ちようちんがぶ  
らさがり、などにはキラキラ光る美しいカーテンがかかっていま  
す。そして、てんじょうのまんなかに大きな電燈があかるいあか  
るい光をあたりいちめんにパツとなげかけています。

「わあ、きれいだなあ。」

と、おもわずみんながさげびました。

テーブルにはごちそうがいっぱいならんでいます。チョコレート、ケーキ、りんご、みかん、バナナ、おもち、せんべい、なんきんまめ、さつまいも、だいこん、にんじん……

大きないやや小さいいや、高いいや、低いいや、いろいろないやがならんでいるので、みんなじぶんのからだにあつたいいやにこしかけました。ぞうさんやうまさんやうくまさんはなるべく大きいのをえらんでかけました。いさむちゃんはまんなかのいすに、ねこのたまちゃんとならびました。

あひるくんやきつねくんは、バナナやチョコレートやケーキなど、なるべくおいしそうなごちそうののっているおさらの前にこしかけました。

「おあがりなさいい。」

「いただきます。」

さあ、それからしばらくは、バクバクバクバク、ベチャベチャベチャベチャ、モグモグモグモグ、みんな話もしないで、むちゅうでたべています。りすくんが両手でじょうずにくりをかかえてたべています。さるくんもいそがしそうにみかんのかわをむいた

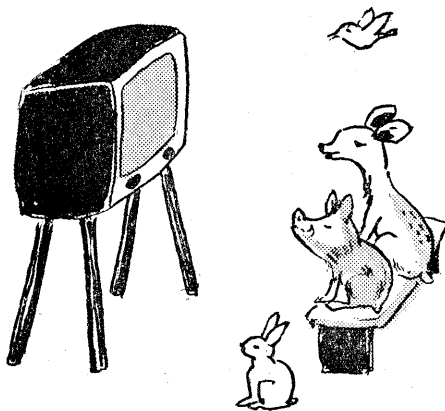
り、なんきんまめのかわをむいています。

ぞうさんが大きなおいもを下にころがして、足でグイグイグイとおして、メリメリメリとつぶし、はなでつかんで口へはこびます。

たった一つのこったようかんに、いぬのころうくとさるのあかきちくんがいっしょに手を出しました。

「ずるいよ、ぼくがさぎだよ。」

「いいや、ぼくがさぎだ、きみなんかもう五つもたべたじゃないか。」





「きみだって、バナナを三本もたべたじゃないか。」

とつくみあいのはじまりました。

おなかがいっぱいになって、ごろんとねてしまったのもいれば

べつの席の友だちのところへ話しに行っているのもあります。

テレビがうつりました。

『ハッケヨイ、くまのオークロくんが、ぶたのぶくぶくくんをおしだしました。』

これは、きょねんの大みそかにとつたすもうのしゃしんです。

つぎは、地球が火星に近づいた日のこと。山の上でやぎくんが  
いっしょうけんめいぼうえんきょうをのぞいています。

『あ、見えるぞ、見えるぞ、火星にも海や山があるようだ。』

つぎは、世界各地の大みそか風景。

南極ではペンギンたちが氷の上で運動会。ヨチヨチヨチヨチと

旗とりきょうそうをしています。

『白、白、早く早く……』

『赤、赤、しっかりしっかり……』

北極ではくまが二ひき、さかなつりをしています。

『どうです、つれますかね？』

『お正月に子どもたちにたべさせたいと思うのですが、人間たちがたくさんとってしまったので、あまりえものはありません。』

たぬきくんが雪の上でスキーをしているところや、大きなわしくんが高い山の上をとんでいるところもうつりました。

そのとき、とつぜんまわりでサーッサーッザワザワザワという大きな音がしました。それといっしょに上のほうから、チャラチャラチャラ、チカチカチカチカという音がきこえてきました。

「いったい、なんででしょう？」

\* \* \*

一月号 22 頁 設計図 「絵をかける壁」は絵を

かくことが出来る、つまり、子どもがいつでも思いきつ

て大きな絵をかけるような壁のことです。

絵が掛けてあるのは間違いですから御注意下さい。

保育者養成機関一覽 (東京都)

\* 幼稚園教諭養成

お茶の水女子大学幼稚園教員臨時養成課程

(国立) 文京区大塚町三五

川村短期大学保育科

豊島区目白町二の一六四三

白梅学園短期大学保育科(兼保母養成)

杉並区馬橋四の五〇〇

東洋英和女学院短期大学保育科

港区麻布東島居坂町九

日本女子体育短期大学保育科

世田谷区松原町二の七一七

宝仙学園短期大学保育科

中野区宮前町四六

国学院大学幼稚園教員養成所

渋谷区若木町九

貞静学園高等保育学校

文京区大塚町六八

東京保育女子学院

文京区原町一〇一

東京保育専修学校

杉並区高円寺三の二九八

立正学園女子短期大学付属幼稚園教員養成所

品川区西中延三の八七七

玉成高等保育学校

杉並区松庵南町一五

駒沢学園高等保育学校(兼保母養成)

世田谷区弦巻町一の一二一

聖徳学園高等保育学校

港区芝通新町一三

竹早教員養成所

文京区竹早町六

東京教育専修学校

豊島区目白町二の一六八五

東京高等保育学校

品川区西品川五の一〇〇二

日本音楽学校付設幼稚園教諭養成所

品川区豊町二の一三二五

草苑高等保育学校

豊島区目白町三の三五七六

\* 保母養成

東京都立高等保母学院

(公立) 港区筈町一八一

東京保母専修学校

杉並区高円寺三の二九八

淑徳高等保育学校

豊島区西巢鴨町三の六一三

幼児の教育 第五十八巻 第二号

二月号 ◎ 定価 五十円

昭和三十四年一月二十五日印刷

昭和三十四年二月 一日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津守 真

発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎ 本誌の購読についてのご注文は発売所フレール館にお願いたします。

## 卒園のお祝いには

くみきあそび	1,500円	〒55円
ホールあそび	盤 10円	紐 50円
中型床上積木	1,650円	〒70円
ままごとあそび	2,000円	〒70円
キンダーえあわせ	70円	〒32円
キンダーバトミントン	250円	〒55円

.....をどうぞ

その他好適品多数とり揃えてございます。

本多鉄磨先生 共著  
高橋良和先生

## 幼児のあそび

第二集

好評発売中 定価 250円 千24円

### 内容

前篇「幼児のあそび」と同じように台本形式の本文で楽譜がついておりいつでもすぐに使える実際的指導書です。あそびも簡単にあそべて有意義なものばかりをあつめました。



株式会社

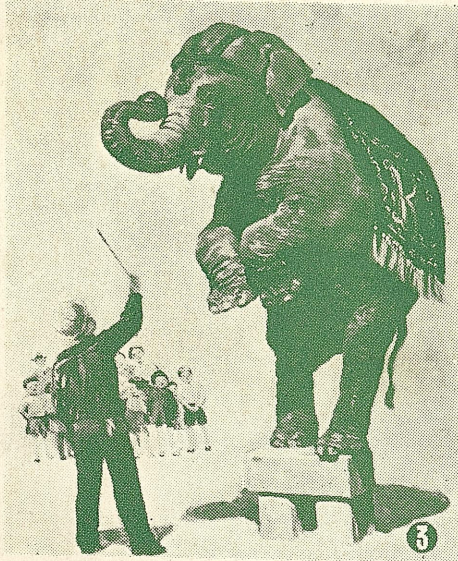
# フレール館

東京都千代田区神田小川町3丁目1番地 電話 東京(29)7781(代)~7785  
掲載口麻 東京 19640番 雷 略「ブンケウ・フレール」

古い歴史と新しい編集の観察絵本

# キンダブック

= 第13集 第12編 3月号予告 =



☆お子さま方の感情と知識を

豊かに育てる絵本☆

△5判・16頁  
毎月付録付  
定価四十五円

《三月号内容》  
どうぶつの なかま

指導・今泉

吉典先生

カット 武井

武雄先生

☆どうぶつえんの そうさん

勝先生

☆なかよし どうぶつ

え・吉沢廉三郎先生

☆とらーねこの

え・武井 武雄先生  
文・小林 純一先生

☆いぬーいぬの

え・村上松次郎先生

☆ゆうえんちの

え・佐藤 照雄先生  
文・佐藤 義美先生

☆ゆりすの あかちゃん

え・林 義雄先生  
詩・小林 純一先生

☆ひとこぶ

え・黒崎 義介先生  
詩・異 聖歌先生

☆ちんばんじー

え・安 泰先生  
文・佐藤 義美先生

☆おやまの ころちゃん

え・富永秀夫先生

別冊付録「つばめの おうち」

工作付録「おてがみいれ」

東京都千代田区 株式  
神田小川町3の1 会社

フレール館

電話東京 (29) 7781~5  
振替口座 東京 19640 番